

The Kansai University Bulletin

Osaka, February 15th, 1926—No. 36

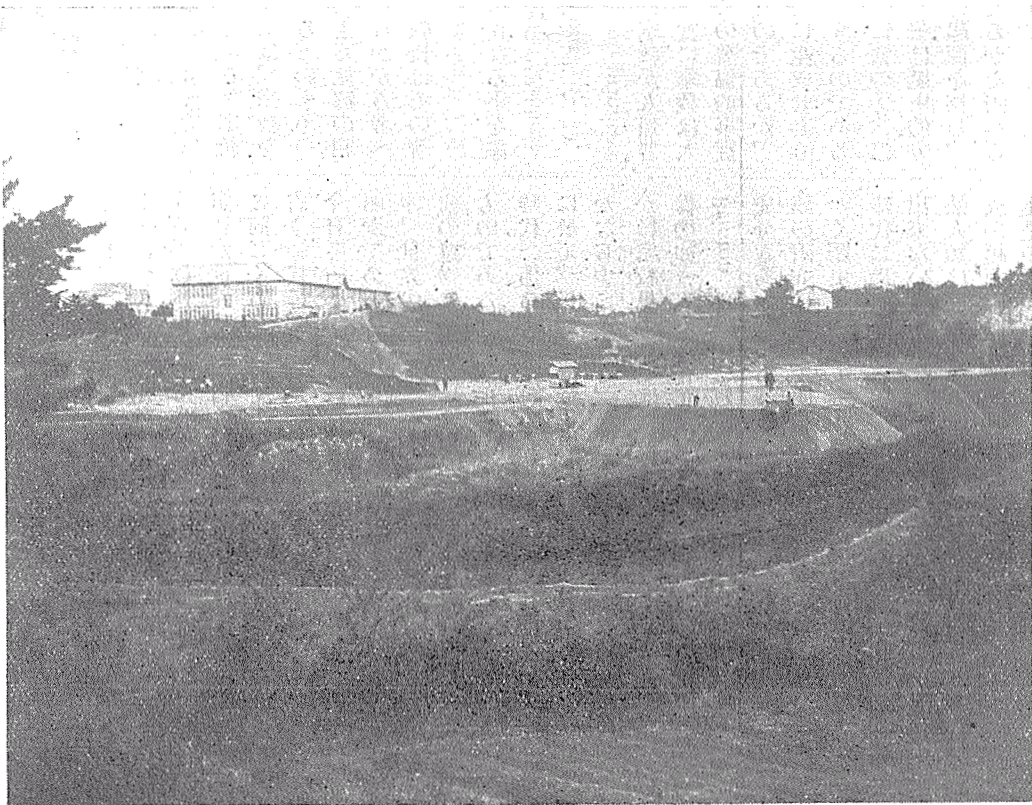
子 里 山 學 報

行發日五十月二

號六十三第

年五十正大

University Stadium under Construction



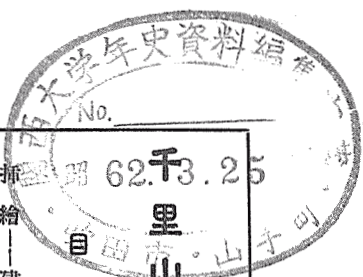
場動運學本の中事工設建

阪 大

堀佐土話電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大



千里山學報 第三十六號

次

- 繪——建設工事中の本學運動場(表紙)——最後に法廷に立てる故柿崎欽吾氏—柿崎氏碑前に於ける本學關係者並に教職員—學廷に於ける第一回軍事教練查閱—物故功勞者追悼會—今田光匡氏—長義道氏—福島野球部員一同—新設運動場設計圖
- 宗教生成とその要因 關西大學教授 櫻井 匡
- 貨幣資本論(一) 關西大學講師 中西仁三
- 學内報——本學關係者の故柿崎氏墓參—定時協議員會開催—千里山學舍に水道開通—運動場工事進行—第三學期授業開始—マールシャル論文集の翻譯—同教授未亡人からの來信—來學年度學生募集—第一回本學軍事教練查閱—本學功勞者追悼會—第二商業學校彙報—本學關係者動靜—本學關係者慶弔—アダム・スミス「國富論」出版百五十年記念會開催豫定
- 校友の面影——今田光匡氏—長義道氏
- 校友彙報
- 學生彙報——學生寄稿
- 關西大學ステディアムの設計に就て
- 千里山學報維持費受領報告

研究

宗教生成とその要因

關西大學教授 櫻井 匡

宗教が人類一般に通ぜざる普遍的の事實である事は今日何人も認むるに可いである。宗教研究の未だ進歩せざる時代に在ては、宗教を以て普遍的の事實ならざるものもあつた。併しそれは宗教の意義に關する見解の相違より來れるものであつて、今日かかる考へを抱く者はない。Robert Flint 教授はその著「Theism and Anti-theistic theories」に於て明らかに宗教が人類普遍の事實なる事を論じてゐる。その他 A. Reville 氏の「Prolegomena of the History of Religions」や D. G. Brinon 氏の「Religions of primitive Peoples」等に於ても明らかに宗教が人類普遍の事實なる事を論じてゐる。實に宗教は人類普遍の事實である。然らばこの普遍的事實は如何にして生成し來たれるものであるか、吾人は今この普遍的な事實が如何に生成せしものなるかに就て研究を進め様とするのである。さて吾人は今この問題の研究に當つて、二方面より進む事が出来る。即ち一は歴史的方法にして、歴史に遡つて、その起源を探ね、如何なる時代に、これが發生せるかを研べるものであり、他は心理學的方法にして、人間の心理の研究より進むものである。

宗教は如何なる時代に現はれて來たものであるか、如何なる文化に於て現はれたものであるかとの疑問は、既にそれ自身に於て、嘗て人類は宗教を有せざる時代があつたが、或時代、或文化過程に及んで漸次發生せるものであると云ふ事を豫想するものである。然し果して人類が宗教を有せざりし時代があつたか如何か云ふに如何なる過去の時代までさかのほつて見ても宗教を有せざる時代を發見する事は困難の様である。Max Müller 氏は宗教が世界と共に古く、人間の知り得る世界と同じく古きものであると云つたが、如何に古き時代に遡つて見ても人類は宗教的である今日考古學の研究によつて見てもこの事實は明かである。E. 〇ッパン云はず、東洋云はず、世界の到るに於て發見される有史前の遺物は明らかにこれが事實の證明となるものである。人類生存の最も古い時代は石器時代であるにせられてゐるが、その石器時代に於て、後期石器時代に在てはその證左明らかならずとも、新石器時代に於ては、明かに宗教思想の現はれを見るべき呢符、偶像の如きものが存在して居たと云ふ事は Brinon 氏らもこれを論じてゐる。尙ほ證左充分ならざる後石器時代に關しても漸次考古學の研究につれて明らかなる事は思はれる。かく歴史に遡つて考へ見るに宗教は如何なる時代に於ても、宗教なき時代は發見する事が出来ない、如何に古き過去に溯つて見ても依然人類は宗教的である。従つて吾人が宗教生成の起源を歴史に遡つて探求する事はむしろ徒勞の事と云はねばならない。然らば宗教生成の起源がないか云ふにそうではない。確かに起源があるのである。然らばその起源を歴

史に探ねないで、これを他の方面に求めんとするのである。

歴史に遡つて宗教生成の起源を求め得ないとするれば、吾人は茲に第二の方法として、吾人の心理的研究に進んで、これを求めんとするのである。即ち宗教なるものが人間の本性に基いてゐるものと云ふ見解から發し、その根本的なるものは何であるか、幼稚未開なる精神状態に於ても、發達過程を通し、文化の進める状態に於ても、不斷に存するところのものは何んであるかを極めんとするものである。この根本的なるものは一體何であるか。吾人は生れ乍らにして或る能力を有つて居るこれを本能と云ふ衝動なきと叫んでゐる。宗教を起すところのものはこの本能なるものであらうか、或は宗教的特殊の能力が存在するものであらうか、本能なるものに就ては、「何ら教養されざる行動を引起す能力」であるに示されてゐる。この本能に對する解釋よりすれば宗教は生の本能ではない。然らば何か特殊の宗教的能力が存するものであらうか。然しかの唯理論に於て主張する如く、宗教を以て人間に先天的に存在するものと云ふ事は今日心理學に於て認めざるに可いである。然らば宗教は人性の如何なる點にその本源を有するものであるか。これに對して或は智、情、意の三方面にこれを求めるものがある。或者は宗教を以て智性に發せるものとなし、或者は感情に在りし、また或者は意志に在りしとするものがある。今吾人は茲に宗教生成の起源に關する二三の説明を研べて見様、最も古きものと云はれてゐる説は Lucretius (ローマの詩人、第一世紀前半頃の人)の學説である。彼は

宗教生成の起源を人間の恐怖の感情に在りて説いたのである。近世に於ては彼の Hume が此の説を主張してゐる。彼の考によれば人は幸福の場合にはその幸福の原因を深く探求するものではない、併し、不幸なる場合、悲しみ、苦しみに逢ふ時には如何にして、この災害を生じたか、何故の苦しみであるか、その原因を探求するものである。即ち不幸は人の怖れるところ、悲しみは人の求めざるころである。この恐れ怖るるの心は、その怖れ恐るる心の原因を探求せしめ、茲に宗教を生ずるものであると説くのである。今日に於ても彼の Westmarch 氏の如きは依然この種の宗教起源説を採つてゐる様に思はれる、

「Origin & Development of Moral Ideas」
恐怖の感情が宗教生成に或る役目をなす事は認めなければならぬ、然し乍ら宗教の生成が全然この恐怖の感情に存する様に説く事は一面に偏せる考へである云はなければならぬ。單なる恐怖の感情は決して宗教心を起すものではない、むしろ恐怖心を除かん云ふ心が在つてこそ初めて宗教心は生ずるのである。故に恐怖心のみを以て直ちに宗教生成の原因である説くのは一方に偏せるものに外ならない。従つてその正反對に立つ Robertson Smith の如き Loving Reverena を以て宗教の起源を見るものも出づるのである。勿論恐怖が宗教を引起す一動機たる事は明かである。然しそれが最大重要なものである云ふ事は出来ない、されば Hume も單なる恐怖心のみであるとは云はず、恐怖は希望の感情と共に宗教の原因をなすものであると云つてゐるが、勿論彼は希望に對しては餘り重要さを認めない様であつて、主として恐怖の感情が宗教を起すもの様に説いてゐるのである。

宗教が恐怖にその起源を有す云ふ説はかく今日に於ては一般に承認されざるものではない、この學說以外に第十八世紀に於ける自然宗教論者の起源説の出づるまでは彼の天啓説が一般に説かれて居た。基督教に於ても又ユダヤ教に於ても、モハメット教に於ても同様に原始的な天啓説を信じてゐた。その考によれば、宗教なるものは吾人人類の本性には何ら關係なく、神によつて與へられたものである。即ち原始に、——始祖アダム、イブ等が創造されエデンの樂園に置かれた時代——神は或る種の形を以て人に現はれ、神が存在する事、人間は神に従ふべき義務ある事或は永遠なる生命等に關する宗教の根本的真理を啓示したのである。さればその宗教なるものは始めより完全なるものであつたのである。神現の如きも唯一神教であつた云ふのである。人間はかかる啓示を受けてその生涯を開始したのであつたが、漸次人間に罪惡が發生し來つたため神の啓示は不明瞭となり不確實なものとなり、遂には殆ど失はれたるが如き觀を呈するに至つたのである。併しかかる天啓説が今日承認せられざるものである事は極めて明瞭である、科學の進んだ今日、殊に聖書批評學の進んだ今日、かかる附説的所論をそのままに信するものはないのである。否聖典そのものに研へて見るも、少しも宗教生成の起源に關しては何ら述べて居ない、むしろ人間が人間として意識的生活をなす様に

なると同時に宗教的意識を得、宗教的行爲を爲す様になつた事しか述べてゐないのである。神が與へたところの宗教が最初より完全なものであつたとすれば、これを受け入れた人間も亦完全であつた筈である、然るに事實はこれに反する。神が完全なる宗教を與へた云ふ事、人間が神より完全なる宗教的性質を附與された云ふ事は別事である。如何に完全なる宗教的真理を與へ示されたとしても、これを受け入るる素質を有せざれば如何ともなし得ない、豚に眞珠の類である。茲に於てか進化論説をさるる人は天啓説を却けてこれを信すべからざる不合理のものとなして一説を立てたのである。即ち人類は漸次進化發展の幾變遷を経て今日の狀態に達したものである。従つて神が啓示せる宗教的真理の如きも、人間がこれを受け入れ、理會するに至るまでには可成り長い時代を経過してゐるのである、云ふのである。成る程かくの如き解釋は一見天啓説とは異なるものの如くに見えるのである。併し尙ほ宗教的真理なるものが神によりて啓示されたものである云ふ點に於て依然天啓説たるに變りはないのである。只人間が發達してこれを理會し得た云ふ事を高潮するに過ぎないのである。然らば人間が漸次發達して理會する事を得た宗教的真理なるものが神の啓示によるものであるか否かは尙ほ問題として残る譯である。果して宗教的真理が神の啓示であらうか。或意味に於てそう云ふ事も出来様、如何なるものでも、これを神に歸する事が出来る、その真理を理會し得る能力も亦神より與へられたもの云ふべきであらう。併し吾人はかかる見解に満足する事が出来ない、出來得る限り、人智の

満足するところまで説明を求めずには居られないのである。然らば宗教的眞現なるものは神より與へられたものでない云ふべきか、若し神より與へられたものではないならば如何にして生じたものであるか。近世第十八世に現はれた自然宗教論者はそれが人の心に生れ乍らにして存するものであると論じた人間が自然に存するところのものも神の啓示により有するところのものも何等異なるものではない、自然教も天啓教も等しきものである云ふ考へを抱いたのである。

然るにまた一方に於ては天啓論に對して反對論を立て、宗教は神の啓示によるものではなく、人間によつて作られたものである云ふ論をなすものが出た。その論するところによれば、僧侶と云ふ人々の生じた事が宗教生成の起源である云ふのである。僧侶と云ふ人は、人間が恐怖心を持つものであり、且つ極めて信じ易い心の持主である云ふ事を知り、同時にこれを利用して自己の利益のためにする事が出来る事を知つた。そして人間を充分に支配して了ふために、信仰だとか、宗教儀式だとか云ふものを案出したものである。且つこれらの人々は遂に人類を全く自己の勢力中に納め、今日に至るまでその勢力を維持し、一特殊階級をなして來てゐるばかりでなく、尙ほ新しく種種なる方法を案出して、人間の迷信的恐怖心を操縦してゐるのである云ふのである。かかる説は今日何人も承認しない、またかかる無法なる説を提出するものはない。かかる説は餘りに皮相の見解であるばかりでなく、宗教に對する無理解無知を示すものであつて、宗教が如何に深く人心の魂にその根底を有するものであるかを

知らない事を明かにするものに外ならないのである。

また宗教を以て人間の心の病的現象であるを論ずるものもあつた。勿論宗教生成の起源を説明するものとして吾人の承認し得ざるころである。宗教的狂信の状態を見れば、宗教は一種の精神病に過ぎざるかも考へらるる場合なしと云ひ得ざるも、宗教を以て全然人心の病的現象なりと断定する事は、それ自体が病的である。成程、一宗一派を起した先覺者等の生活を見る時、如何にも狂的に見えるものがある、ホセアが豫言者として起ち、民の不倫、國家の破滅を豫言した時、その民は彼を如何に見たであらう、キリストは如何に、マホメットはさうであつたらう。如何にも狂的に見えたであらう、故郷に容れられない馬鹿者、狂人に見られたのである。然らばそれは眞に狂人であつたらうか。而して宗教なるものが人心の病的現象なのであらうか。無宗教を以て人間普通の状態となし、宗教を以て病的現象であるとなして吾人は承認し得らるるであらうか。吾人はむしろ宗教は人心の正しき状態であり、常態にある人間の本性に發するものを見るのである。

さて以上に於ては今日重要視されず、むしろ顧みられざる宗教起源に關する諸説を述べて來たが、更に近世に於ける一二の學説をも研べて見様、近世に於ける諸説は何れも科學的歴史的研究をこり、能ふ限りの事實を蒐集し、これに基いて宗教生成の起源を説明せんさせるものである。尤も事實を基礎させるものではあるが、尙ほ最後の結論に達するためには可成りに推量的分子が含まれてゐるのである。先づ E. B. Tylor がその著

「Primitive Culture」に於て論述せる學説を見様。彼に従へば人間は未開時代に於ては自然並に人の周圍をこりかこむ凡ゆる事物が生命を有するものと考へた。目に見える一切のものは生きて働き、聞ゆる凡てのもの、觸るる事の出来るものは凡て生命を有つて働くものであると考へたのである。原始人は凡ゆるものを説明するに自分と事物を同一に見たのである。樹の搖ぐを見れば、それは自分が木を動かすのと同様であるを考へる故に風が吹いて樹木が搖ぎ、唸りを發するのを見ればそれは人の目には見えないが何者か或偉大なるものが在つて、自分が手をこつて樹を搖がすと同様に風を起し木木を搖かしてゐるのだと考へる、獨り木木の風に動く有様ばかりではない、凡ゆる現象に對しての説明をなすのである。されば原始人は石の如き生命なきものにも尙ほ生命あつて活くものと考へるのであつて、石が地中に埋められて居る間に子石を産むと云ふ信仰さへ生じたのである。かく原始人は凡ゆる事物は生命あるものと考へたのであると、かく考へたタイラー氏は所謂 Animism を以て宗教の始源であるとなしたのである。

併し乍ら Tylor 氏のこの説も未だ缺點なきものと云ふ事は出来ない。原始人が凡ゆる自然界の事物を生命あるものと考へたこと云ふ事は吾人も尙ほ認めることである。併し乍ら原始人に云つても事物に生命あると考ふる様になつたのは餘程進んだ後の事であるに相違ない。何故かなれば、原始人にして未だ自分自身が精神と肉體との兩方面を有するもの肉體の外に精神を有するものであると云ふ事を知らないでは自然界の事物に生命あり

云ふ様な事は到底考へ得られざる事である。云はねばならない。かく物、心の區別を知らざる原始人に於ては所謂 Animism の信仰を得る事は困難である。Tylor 氏が云ふ様に原始人がこれを信じたことすればそれは餘程文明の進んだ時代に於て爲されたものに外ならない。然るに未だ物、心、の區別を知らざる原始人にては尙ほ宗教を有し、何者かを神聖なものとして崇拜してゐたのである。即ち Animism 以前の宗教があつたこと見なければならぬのであつて Tylor の説明はこれに及んでゐないのである。この點に關し R. R. Marett 教授はその著「The Threshold of Religion」に於て Tylor の學説に對する批判を下して大に論じてゐる、がその中で Tylor は Animism を以て宗教の原始の形式であること云ふ事を説いてはゐるが、何故人間が Animism に於ける精靈を信する様になつたかに關しては何ら論じてゐないこと云ふてゐる。事實 Tylor は宗教生成が如何にして生じたかは説いてゐないのである。

また Herbert Spencer は宗教の最原始の形式は祖靈崇拜であると論じてゐる。原始人は死せる人々が靈魂となつて、死後も續いて存續し、生前親しき人々の近くに居るのであると信じて、この靈魂を崇拜するのである、而してこの靈魂に對する禮拜から漸次、自分らの周圍に在る凡ゆる自然物をも崇拜する様になつたものである、即ち宗教は祖靈崇拜に始まつたものであると論ずるのである。併し乍ら何故に死者の靈に對する禮拜を以て宗教の原始形となしたのであらうか、その他にも死者に對する同じ程度に原始人の注意を引いたものがあるであらうに、獨り死者のみを

こつて最原始の宗教形式であるとなしたのは何故であらうか、これ彼の説に投げらるる疑問である。

以上述べたところは宗教生成に關する諸説であつて、未だ吾人が論ぜんとする宗教生成の問題の解決には達してゐない。即ち人類が神らしきものと思惟せる或物に對し、これを禮拜する様になつたのは如何なる理由によるものであるかは未だ論じてゐないのである。宗教なる現象は如何にして生じたものであるか、吾人はこれを次に論ぜんとするのである。

さて吾人は前に人間は凡て宗教的である、人間であること云ふ理由で、人間は常態として宗教的である事を述べた。即ち人は宗教的性質を具備するものである。如何なる人でも宗教に進む傾向を有つてゐるのである。只この傾向が或一定の宗教となつて明確に現はるるには或る適當なる刺戟を必要とするのである。宗教が明確に人間に現はるるにはそれまでに外界より來る様様の刺戟に應じて働くものが存するのである。それ故に宗教は人の心の本性に存するものであること云ふ事が出来るのであるが、それは未だ外部に現はれたるものではないのであつて、此れが外部に現はるるにはそれを働かすところの刺戟が必要なのである。即ち宗教を生成する要因はこれを内外二部より成るものと云ふ事が出来るのである。主觀的要因、並に客觀的要因これである。

然らば原始人の心に刺戟を與へ宗教性を働かすところのものは何であらうか、即ち客觀的要因なるものは如何なるものであるか云ふに、それは、自然界、境遇、並に社會等である。これらの外界は決して只一つの點を刺

載するものではない、種種なる點に刺戟を與へるものである。燦然と輝く太陽の東天に昇るまき人はこれを美しきも感じて見るであらう、また強き力の感じを受けるものもあるのであつて、凡ての刺戟が悉く宗教的意義を有つものである云ふ事は出来ないものであるが、極めて不思議云ふ感じを與へ、神妙しく、崇嚴なるもの前に立つてゐる云ふ感じを抱かせるものがある。これが宗教性を強く刺戟させるものであつて、この神秘の感畏敬の念は人間をして何か自分の有せざる或る者を有さうとする欲求を起こさせるのである併し乍ら人がかく或る外界に接して、宗教云ふ特殊の感じを受くるのは何によるのであらうか、また神らしきものと思ふもの前に立つて、歸依の情さか畏敬の念を抱くのは何によるものであるか。それは人間が宗教的傾向を有するが故である云ふ丈けに止まつてゐる。これ以外に云ふ事は出来ないのである Max Müller 氏は人が宗教心を起すのは「無限の感」あるがためだ云つてゐる。彼のこの論は多くの批難を受けたものではあるが兎に角外界よりの刺戟を受け夫れに應ずるころのものの中に存しこれが遂には宗教となつて現はれるものである云ふ事を示すものとして一説たるに相違ないのである。

さて外界事物にして原始人に刺戟を與へたるものは決して一様ではない。種種あるが、何が最も早く原始人の注意を引き、その宗教心を活かしたものであらうか。この點に關しては様様の説をなすものがある。既に述べたる如く Tylor は Animism に於ける心靈であるをなし Spencer の如きも祖靈であるを

論じたのであるが、何れも充分なる説明と見る事は出来ない事は既に述べた通りである、或はまた動植物が最初に原始人の注意を刺戟したものであると論ずるものもある。即ち或る動物若くは植物を以て自己種族と同一血族に屬するものと考へてこれを崇拜する様になつたものであるをなし、所謂 Totemism を以て最古の宗教であるをなすのである。彼のフランス社會學派の重鎮たる Emile Durkheim は Totem を以て「聖なるもの」であるを考へてゐる。彼の考へによれば、宗教なるものは超自然的のものでもなく、また神に對する信仰でもない、只「聖なるもの」に對する意識的關係である Totem はこの聖なるものの典型である云ふのである Totem が聖なるものである云ふのは、その内に或る非人格的な神秘な力であつて、人間及び事物の活動を引起すころのものであるを考へられるからである。さらばその特殊なる神秘力が存在する云ふ事が如何にして原始人はこれを知り得たのであるか云ふ點に關して、彼は説明して、この力の存在は社會によつて起されるものとなした。集團意識と個人意識とは同じ經驗ではあるが集團生活に於ては個人が單獨で居て經驗する以上の或物を得る事が出来る。即ちこの社會云ふ集團生活にはこの神秘的な力を有つてゐる、而してその Totem はその表徴であるを考へたのである。故に崇拜する對象は Totem ではあるが事實崇拜するころのものは社會そのものである云ふのである。社會は實に彼によれば神である、唯一つなる神は實に社會なのである。氏族に於ては氏族そのものがその氏族の神である。成程

宗教は社會的關係である云ひ得るかも知れない、併し、それだけであるとは云ひ得ない様に思ふ。何んとなれば單に社會的關係云ふ事は人間同志の交渉關係に外ならない、只人間同志が交渉を保つのみであつて、人間以上の超自然的存在を認めず、これの交渉を得んごしない云ふならばこれを宗教と見るべきか否かを疑はなければならぬ。世界史を開いて凡ゆる世界の宗教を見るに、何の宗教であつても、單なる人間同志の交渉のみの宗教を發見する事は出来ない。人間同志の交渉を保つと共に、人間以上の存在を認めこれの交渉を得んごするものならざるはないのである。果して宗教に超自然的存在はないであらうか、また宗教は社會關係のみであつて、個人的關係云ふものはないであらうか。彼らの一派はこれに答へて然り云ふのであるが、吾人はこれを認め得ないのである。また呪物を以て原始人の精神を刺戟し宗教現象を生起せしものであるをなし、最原始なる宗教は呪物崇拜 Fetishism であるを論ずるものもある。即ち木片、石塊の如きものを崇拜するのである。或はまた日月星辰の如き自然現象であるを論ずるものもある。太陽が天に高く輝き、雲影浮遊する有様は確かに原始人の心に或刺戟を起したりしならんは考へ得らるるころである。或はまた風雨、雷霆の如き、山岳河海の如き何れも原始人の心を刺戟するに足りたであらう。而してこれら自然現象を神化して崇拜する様になつたとも考へ得らるるのである。然れども自然現象より受くる刺戟が最も早く行はれたか否かは容易に斷定し得ざるころである。同様に呪物

崇拜或は祖靈崇拜が最古の宗教である云ふ事も出来ないと思ふ。原始人の心を刺戟したころのものが或時には呪物であり、或場合には動植物であり、或は大自自然現象であつたに相違ない。その何れが最初に原始人の心を刺戟したものであるかは今後とも容易に明かならしめ得ない事であると思はれる。 Max Müller がこの點に關して「宗教の起原に關し眞に確乎たる斷定を下し得る時は未だ到來してゐない、否今後とも到來する事はないだらう」云つてゐるが、これは誠に然りであると思ふ。

以上を於て吾人は宗教の生成には主觀、客觀の兩要因の存する事を述べ、種種なる外部的要素が刺戟となり、内心のこれに應じて作用し茲に初めて宗教なる現象は現はれるものなる事を述べたのである。宗教は決して人間に關係なく神の與へたころのものではない。また人間精神の病的現象でもない。而してまた吾人精神中に存する特殊能力でもなければ、病的現象でもない。それは實に吾人の精神と外界事物との接觸によつて生ずるものである。

而して如何なる外界の事物が最も早く原始人の精神に刺戟を與へたかに關し、前述の如き或は呪物でありをなし、自然界であるをなすのであるが、何れかその一を以て最原始のものであるをなす事は出来ない、むしろ種種なる此らの外界事物が何れをなしに刺戟を與へたものであつて、漸次進んで来て、一定の形式をとり、呪物崇拜となり、牛靈崇拜となつたものを見るべきものであると思ふのである。

(元)

貨幣資本論 II 貨幣の資本性 (一)

關西大學講師 中西仁三

第一節 序論

第二節 貨幣資本學說の批評

第三節 貨幣資本概念の構成

第一節 序論

貨幣が資金の形態の下に一般に貸借せられて、其れに對して一定の利子の生ずるは吾人の日常目撃し何等之れを怪まざる處の現象である。中世時代の教會法學者が貨幣は其れ自體として子を生まざるもの (barren) なりとの理由の下に、利子禁止を説きたるに反して今日の經濟學者が貨幣貸借に利子の生ずる事を肯定し居るは如何なる理由に基くものであらうか。中世時代の貨幣の貸借は主として消費目的の爲めに行はれたるものなるも、現在に於ける貨幣貸借は主として生産目的の爲めに行はるるものなるが故に、前者の場合に於いては貨幣には生産力なしとするも後者の場合には貨幣は生産に使用せらるるの結果として生産力を有し、貨幣の生産力の結果の一部は利子となつて貸主に交附せらるるものなりとの理由にて、今日は利子の存在を肯定せんとするを普通とみなすものである。然し今日の貨幣貸借は主として生産目的にて行はるるに雖も、消費目的にて行はるる場合もある、此の如き場合に於ける利子發生は如何に説明すべきものであらうか。更に貨幣を以て生産したる結果の一部を以て利子を構成するものなりとなすも、生産の結果として利益を得べきや

否やは豫め之れを知る事を得ざるべし、然るに貨幣利子は貨幣貸借の行はるるに際して契約せらるるもので、生産の結果利益を齎すに至るや否やを論せず契約せし利子は當然支持はなければならぬ。左れば利子肯定の理由をば貸主を以て生産を行ふより得べき利益の一部を貸主に交附するこの點に求むる事は、一般的には適用し得ない議論なりとせなければならぬ。吾人は如何なる點に貨幣利子肯定の理由を求むべきであらうか。吾人の考ふる處に隨へば以上の理由は現代の經濟社會に於いては貨幣と資本とは共通の性質を有するものなる事、即ち貨幣と資本との共通の本質に求むべきものなりとなすのである。

資本とは何ぞやとの問題に對しては、一般に財貨の生産方面より之れを觀察し其の結果として、資本とは過去の生産の結果にして、之れを直ちに消費せず將來の生産に使用せらるる財貨なり、即ち資本とは現實に生産に使用せらるる生産財貨にして、土地、自然、勞力と共に生産要素を形造るものなりとの定義を生み出すに至れるものであるが、以上の如くに資本概念を生産的に且つ物質的に解するのみに於いては、現在の資本主義經濟組織に於ける資本なるものの意義を了解し得ないであらう。資本主義經濟組織に於ける資本なる概念は具體的なる生産に使用せらるる財貨を意味せずして、一の經濟上の力 (Macht) を指示するに外ならないものである。又貨幣資本 (Geldkapital) 即ち資金として金融論の研究の對象たるものは何ぞやをも、解釋する事を得ないであらう。資本概念を正確になさるが爲めには、資本と資本財とを嚴格に區別せなければならぬ。Hiltebrand が總ての資

本は其の形態よりすれば變化するものなれども、其の大小よりすれば變化せざるものなりと論じたのは、以上の點を明白になしたるものなりと見る事が出来る。一定の貨幣額にて示されたる資本の大きさは變化する事なきものなるが、其の資本を構成する資本財即ち資本の形態は常に變化し居るものである。即ち瀧其れ自體の大きさは變化するものではないが、落下する水は常に變化し、水は變化すれども瀧其れもものは變化せないので、恰も資本と資本を構成する處の資本財との關係を示すものなりと考へてよからうと信ずる、資本なる概念は之れを物質的に具體的に解して、生産に使用せらるる財貨なりと見るべきものではなく、抽象的に貨幣額を通じてのみ解すべきものである。資本は財貨を意味せずして一の經濟關係なりと見るべきもので、此點を誤解する時には正確なる資本概念は捕捉し得ざる結果となるのである。

資本概念其他一般の經濟上の概念を正確ならしむるの困難は、事物其の物のみに捕はれて之れを考へ、經濟上の概念は同一の事物が種種異なる役目をなす處の、一の社會的關係を示すものなる事を無視するより生ずるものである。金は貨幣として見れば一の流通手段として財貨流通組織發達の一定時期に於ける關係を示すものであつて、又他の關係の下に於いては金は資本となり得るものである。左れば金は貨幣は資本なりとの質問は要旨を誤れる質問である。即ち貨幣は多くの場合には貨幣たるに止り他の場合には資本となり得るであらう。而して茲に資本と云ふは資本の商品形態、資本財と區別せらるべき資本の貨幣形態を指示するのである。事物其れ自體

に資本性を歸屬せしむる事は誤謬にして、社會の發達の一定階段が事物に對して貨幣形態又は資本形態を與ふるものである。以上の所説よりして考ふれば、資本概念は絕對的の概念ではなくして一定の社會に於いてのみ生じ得べき處の相對的概念なる事を知らなければならぬ。生産要素の一として生産財を意味する資本概念、資本財なる概念は社會關係の發達段階の如何を論せず、苟くも財貨の生産行はれ財貨の生産が自然力及び勞力のみを以ては行ひ得ずして、其他の生産財を必要とする以上は常に存在し得べき概念なるに反し、純粹の資本概念は一定の社會關係の下に於いて經濟生活の行はるる場合に於いてのみ存在し得べく、社會關係の變化は純粹資本の存在を許さざるに至るやも知り得ないものである。換言すれば現在に於けるが如く一定の貨幣額にて表現せられたる資本が經濟的の力として經濟活動を指揮し支配し得る、所謂資本主義經濟組織に於いてのみ存在し又考へ得べき概念なりとなすべきものである。

資本を解して資本財なりとなすは、資本概念を正確ならしむる上に於いて、資本の技術的物質的觀察なりとして全然之れを避けざるべからざる理論である。資本は物質的に解して生産手段又は生産要素と見るべきにはあらずして、一の貨幣現象となすべきもので、資本は財貨本來の性質ではなくして、財貨觀察の一の方法である。貨幣所得を決定し之れを比較する貨幣的計量 (Geldrechnung) に外ならないものである。資本概念は貨幣經濟組織即ち貨幣を以て財貨の流通行はるる經濟組織に於いてのみ存在し得るもので、資本概念の考察は流通經濟を出發點となすべきものなる

事を知らなければならぬ、若し生産經濟を出發點として資本概念を説明せんことをすれば、資本の本體は之れを捕提する事を得ずして、其の試みは常に失敗に終らざるを得ないものである。何となれば資本は財貨の生産より生ずべき概念ではなくして、財貨の流通よりしてのみ生じ得べき概念であるからである。資本は生産財貨自體として之れを具體的に考ふべきものには非ずして、財貨流通に於いて其の配分に對して一の獨占的排他的の要求權を表現する一の經濟的力として見るべきものである。左れば資本概念は常に觀念的に抽象的

に入り來るものである。資本概念も貨幣概念も共に流通經濟の產物であり流通經濟を出發點としてのみ初めて之れを了解し得るものなるが、由是觀之貨幣の資本性なる問題に對する解決の鍵は流通經濟的觀察に求むべきものなる事を考へ得るであらう。

のみに解する事を得べきものであらう。要之資本概念は生産的に物質的に具體的に之れを解する限りは、決して其の真相を得べきものでない。流通的に觀念的に抽象的に之れを解するに於いてのみ、初めて資本に對する正確なる概念を得るに至るものであり、又此の如く解する場合に於いてのみ財貨流通手段としての貨幣と資本との間に一脈相通する共通の本質の存在を發見し得るに至るべきものである。一定の貨幣額にて示されたる處の資本は之れを各種の生産財貨—資本財—に具體化せしむる事に由つて、初めて生産經濟に入り來るものであつて、資本其れ自身には何等生産力存在するものではなくして、生産力を有するものは生産財たる資本財のみである。即ち資本は所詮流通經濟に於いて生じ流通經濟に於いてのみ存在し得るもので、之れを資本財に具體化する事に由つてのみ生産經濟の範圍内に入り來るものである。貨幣も亦生産經濟の產物ではなくして、流通經濟に於いてのみ存在し得べきもので、資本財を購買し以て生産を行はしむる事に由つてのみ生産經濟の内

其れ自身としては何等生産力を有せざる一定の貨幣額にて表現せられたる處の資本が何故に一定の利子を生むや、資本の借主は資本の貸主に對して何故に一定の利子を支拂ひ、社會も之れを以て正當なりとして怪まざるやの問題、即ち Marx が商品流通貨幣流通を $W—G—W$ $G—W—G$ なる記號を以て示せるに倣へば茲に謂ふ所の貨幣利子の問題は $G—G$ を以て示す事を得べく、之れが肯定せらるる原因如何の問題は、上述せしが如くに貨幣の資本性を證明する事に由つて、解決し得べきものなりを考ふ。資本と貨幣との共通的特質は何處に求むべきや、何故に貨幣額に表現せられたる資本に利子の生ずや其の原因如何に就きて、以下 Steinberg の説く處を紹介して見やうと思ふ

J Steinberg, Das GeldKapital
Erster Teil Geld als Kapital
S. 20-60.
Bonnen Staatswissenschaftliche
Untersuchungen Hef. 4.
註 資本概念の歴史的變遷に就きて見れば、最初の資本を貨幣的に之れを觀察したるものが重農學派以來資本を具體的に觀察して生産財貨と見るに至れるものである。

(一) 貨幣資本學說の批評

吾人の經濟生活が國民經濟學に其の解釋を要求するが爲めに、常に新しく生じつつある

經濟問題中に於いて、問題の範圍及び重要さが、經濟的發達進歩の速度の急なるに隨ひ、經濟生活範圍の擴大するに隨ひ、又經濟生活の複雜性の増加するに隨ひ、常に擴大され其の完全なる解決の必要益緊急なるに至る處の一の問題が存在する。而して其の問題は貨幣資本の問題を指示するもので、換言すれば、貨幣は何故に一定條件の下に於いて利子を生ずるや、貨幣に具象せられたる價值が何故に餘剩利得を獲得するを得るやの問題に外ならない。

個人に依つてか株式會社に依つてか銀行に依つてか、國家に依つてか消費目的にか生産目的にか、鑄貨の形式にてか紙幣の形式にてか手形形式にてか、帳簿信用の形式に於いてか、以上何れの場合を問はず、總ての貨幣貸借に就きて其の共通的特質は、貸與せられたる貨幣額が其の所有者に對して、一定の利得を齎すの點に求むる事が出来る。以上の如きを貨幣利子の發生に對しては、貸與せられたる貨幣を以て購買せる財貨が、財貨所有者に一定利得を齎し其の一定利得の一部を貨幣貸借に於ける債務者が利子の形式にて、債權者に提供するものなりを、一見説明し得るのである。貨幣は—市場に於ける財貨に對する購買力を其の本質とせず貨幣—市場に於いて生産要素と交換し得べき一の特質を有するものであつて、此等生産要素の生産的使用よりして利得は生み出さるものである。此の意味に於いて貨幣は所有者の手に在つては、利得獲得の手段として見られ、貨幣は餘剩價值を齎すの手段として、人人に利得を生み出す財貨(ersatzbringende Güter)として考へられ、此の如き財貨として一般に需要せられ、又一定

の報償を以て貸借せらるるものである。貨幣と交換し得る財貨が利得を齎すが故に、貨幣自身が利子を生み出すものなりとせらるるものであつて、此の如く貨幣に利子を生み出す能力の存在する事が、貨幣をして資本たらしむるに至るものである。換言すれば貨幣と交換し得る財貨が利得を生ぜしむるが故に、貨幣にも利得を生じ、貨幣に利得生ずるが故に貨幣が資本たりと論ぜらるるのである。

以上の如き論法を以て、資本としての貨幣現象の可能を立證し得たりとなされ、此の如き意味にて經濟學者の大部分に依つて、意識的に又無意識的に、貨幣の資本性は承認せらるる處となつたもので、貨幣概念と資本概念との無意識的同一視は、重商主義時代以來國民經濟學全般に於いて傳統的信念として、明かに認め得る處の理論である。

此の如き皮層なる表面的の論點より出發して、問題の根本に迄觸れんが爲めに、該問題を詳細に且つ深く論じ居る處の、若干の議論を一瞥して、此等の議論を批判的に考察する事に依つて、貨幣資本の問題に對する正確なる了解を得べき途を開かん事を欲するのである。唯之れに先ちて貨幣資本なる概念は營利資本としてののみ考へ得べきものなる事を知らなければならぬ。M. Weber が資本概念が概念分類上價值あるものたらんが爲めには唯個人經濟的營利資本として解すべきものなりとなせし事は、正當なる議論なりとせなければならぬ。

此點に就きて Liehmann は、資本概念の發生の前提として、多數個人經濟間に生産手段の配分せられ且つ交換せらるる事を必要なりとなし居るのは、正當なる見解なりと見るべ

く彼れに採つては國民經濟的資本なる概念は經濟政策的の概念にして、各個の個人的經濟を組織する單位としての、國民の資本の總計額としての資本概念は、何等實際的意義を有せぬものである。此の如く資本概念を個人經濟的現象と見るの意見は L. v. Stein, C. Menger 其他の學說に於ても見出し得。

貨幣資本の理論に就きての概説は、貨幣を以て個人的資本の一部と見るの學說より、始められなければならない。個人的資本は一經濟主體の所有に屬する財貨及び、他に對する財貨の給付より生ぜし債權の兩者より成立するもので、兩者を通ずる特質は經濟主體に利得を齎すの點に存在するのである。吾人は Schmoller の定義に倣ひて、個人的資本とは自己の事業に直接にか、又は第三者の事業に對して貸與の形式にてか、營利を目的として投下せられたる財産—自己の利益の爲めに自由で使用し得る權利の存する財貨の總體—なりとすなす事が出来る。即ち個人的資本概念の下に於いては、經濟人に對して利得を持ち來す財貨の總體—財貨が何れの人の手に存在するやは之を論ぜず—を意味するを常とすのであつて、若し財貨が其の所有者の手に存せ

ない時には、財貨は財貨要求權—例へば手形株券其他の有價證券—に依つて、代表せらるる事を必要とするのである。貨幣も亦此中に包含せらるるものである。此等財貨要求權の大部分—手形倉庫證券其他—は法律上拘束力を有する權利たる特質を表示するものなりこの事實は、決して此等要求權の經濟的性質を度外視して可なりとすものではない、此等權利の根底には經濟的取引の結果として、一經濟主體より他の經濟主體に給付せられたる

處の經濟財の存在するもので、吾人の興味を喚ぶるものは、財貨の給付より生じたる關係の法律的方面ではなくして、法律關係の背後に隠されたる經濟的行爲なりとすべきである。一經濟主體が一定財貨及び要求權に對して支配權を行使し得るの事實は、法律的に歴史的にのみ説明し得べしこの理論は、經濟學者の大部分をして、歴史的法律的の現象としての個人的資本概念を構成せしめ、經濟的技術的現象として社會的資本概念に對立せしむるに至つたものである。此等の經濟學者に屬するものとして Rau, Rodbertus, Wagner 及び奧國學派の代表者を示す事を得べく、以下其の學說を批評せんとする處の Spiethoff も以上の立脚點に立ちて、貨幣資本問題を詳細に論じたるものである。

Spiethoff は法律的抽象的概念として營利的又は個人的資本概念を構成して、一般財貨の世界に對立せしむるのである。即ち自由なる又利殖せられんが爲めに資本市場に表はれ來る處の、營利資本を稱して貨幣資本と稱するのである。無論彼れは以上の如き定義を文字通りに説明するのではないが、彼れの以下示すが如き理論よりして當然斯く推論せらるべきである。彼は貨幣資本なる語を以上の意義にて屢使用して居る。自由は處分し得べき資本のみが供給せられ得べく、之等の資本は全體の營利資本の極小分子を形成するものである。資本市場に於いては營利資本は、容易に他の形態に變化し得る形、即ち第一には貨幣として、又は容易に賣却し得べき有價證券として、又は銀行に對する即時拂の要求權として表はるる場合に於いてのみ、供給せられ利用せられ得るものである。自由資本の所

有は一般的の財産權として又購買力として表現せらるる處の、貨幣に對する支配力として表はさるるを常として居る、彼れに隨へば支拂手段は之れを以て資本財を賣買し得るが故に資本を意味し、貨幣は資本として表はれ資本と同一の効能を有するものである。貨幣と資本とは各獨立せる本質を有するものなれども、貨幣經濟の下に於いては兩者を區別する事は困難とすべく、貨幣は資本と同様に働き資本は其の作用を發揮するが爲めには、常に貨幣の存在を必要とするものである。

上述の説明は次の如き結論をして正常ならしむるであらう。彼は貨幣資本なる概念の下に於いては、自由にして且つ購買力あり容易に他の形態に變化し得又普通貨幣形態にて表はるる資本の所有なる事實を意味せしめんとするのである。貨幣資本又は貨幣形態にて表現せらるる購買力は財貨—勞力享樂財又は生産財貨—を賣却する事によつて、獲得し得るものである。貨幣資本が資本市場に於いて利用せられ利得を生み出すに至るは—普通營利資本—貨幣資本が、最後に於いて財貨の形式を探る事、即ち將來の生産に直接又は間接に使用せらるる財貨を購買するが故である。

今や上述せし Spiethoff の學說及び今日尙ほ一般に行はるる處の、貨幣を以て個人的資本の一部又は其の表現形態なりとする思想に對して、批評的に考察すべき順序をなつた、貨幣を以て資本の一部と考ふべきものなりや又は資本の表現形態なりやの問題は、論ずるの必要な問題であつて、兩者何れなりとするの必要なき前提として、貨幣が資本性を有するの事實及び其の理由を立證せなければならぬ。之れを立證するが爲めには先づ、資本概

念を特徴付ける處の特質が、貨幣に於いても存在し又存在し得べき事を、示さなければならぬ。資本概念の根底に利得又は餘剩利得創造なる觀念が存在するものとせば、貨幣が資本たり得るが爲めには貨幣にも同様の觀念の前提で存在する事を必要とするのである。貨幣の資本性を證明するが爲めに、單に貨幣が現實に利得を得つつありこの日常の經驗的事實を指示するのみにては、足れりとなす事を得ない。此等の事實の背後に存在する經濟的の緣由を研究して、之れよりして貨幣が利子を生み出し得べき可能を演繹的に説明せなければならぬ。Spiethoff 及び彼れと同一の立脚點に立つ處の論者は、貨幣は直接間接將來の生産に利用せらるる財貨を購買し得るが故に、貨幣資本は利殖せらるるものなりと論斷するものなるが、之れによつて彼等は問題を解決したるには非ずして、却てつ新らしい問題を提出したるものである。財貨が餘剩價值を創造するこの事實よりして、貨幣も亦餘剩利得を生み出すものなりとは、結論する事を得ざるべきであらう。貨幣は生産財貨を購買する事に依つて、買手より賣手に移轉せらるるものである。此の場合に於いて所持者を轉轉變動して遂に一定の流通期間後に、或る人の手に留る處の貨幣が其の最初の所有者たりし第一の購買者に、利得を齎すに至るべきの理由は發見するに苦しむ處である。又貨幣が流通せずして最初の買手たるべき人即ち貨幣の所有者の手に殘留する場合に於いては利用せられざる潜在的購買力として貨幣は何物をも生産する事を得ざるが故に、貨幣は利得を齎すものではない。何となれば價值の増加は貨幣が生産手段を購買するが爲めに提

供せられたる時に、初めて生ずるものであるからである。貨幣が所有者の手に留るか又は所有者を轉轉するか何れの場合を問はず、貨幣は所詮一の流通手段にして、貨幣其れ自身としては何物をも生産する事を得ないものである。Spiethoffが貨幣を以て生産財を購買し得るが故に、貨幣資本は利得を生み出すものなりと主張する處は、生産財が餘剩價值を生み出すものなりとすのみにして、貨幣資本が餘剩價值を創造するものなりとの證明はなかり得ざるものである。以上の説明によつて、彼れが貨幣の資本性を確立するが爲めに援用する處の、唯一の論據は破れたるものなりとすべく、隨つて資本の表現形態又は其の一部として見る處の彼れの貨幣資本概念は架空的議論なりとせなければならぬ。

次に彼れが用ふる貨幣資本なる概念は其の内容よりしても誤謬なる事を知らなければならぬ。彼れが貨幣資本の特質として第一に容易に處分し得るものなる事を擧ぐるの結果として、彼れの貨幣資本の概念中には有價證券のみならず賣却し得べき商品をも包含せしむる事となり、以て該概念の内容を不當に擴大するに至つた、有價證券—株券社債券等—及び賣却し得べき商品は共に貨幣資本中に包含せしむべきものではない。有價證券が利得を齎すは、生産的に活動し價值創造を目的とする企業に對する、參加權を内容とするものなるが故に存し、貨幣概念を同一視する事を得ないものである。有價證券は貨幣同様に他の價值形態に轉換し得るものなるが、其の然る所以は後述する處に依つて明白となり得るが如くに、貨幣が一般的交換性を原因とすなす異り、他の經濟的原因に由るものなる事を

知るべきである。賣却し得べき商品も決して貨幣を同一視する事を得ないもので、假令此等の商品が容易に貨幣に變形し得るに雖も、其れを以て直ちに貨幣資本なりとすなし得ない。彼れは營利資本に就きては他の價值形態に容易に轉換し得べき特質のみを力説して他の特質たる餘剩價值創造なる事實を輕視するの誤を犯すもので、換言すれば營利資本の貨幣性のみを注意して、其の資本性を不當にも度外視する弊ある事を認めなければならぬ。彼れは具體的の財貨集團に對立せしむるに抽象的の購買力を以てするが如くに、營利資本に對して生産資本を對立せしむるもので此等兩資本を無定形なる常に相互に變形し得べき處の集團として之れを見、之等が初めて資本の特性を發揮し得べき、餘剩價值創造の行程又は價值付の行程即ち動的狀態を全く解折しなかつた缺點を有する事は否定し得ないのである。

Beckertも亦其の著書資本及び貨幣市場に於いて、主として市場に於いて行はるる財産の移轉のみを觀察して、生産的方面に於ける財産の發生及び利用に就きては論ずる處がない。財産なる概念の下に於いて、彼れは一般的形態として貨幣額にて表現せらるる、現在の財貨及び勤勞給付に對する即時的現在の支配權を意味せしめて居る。而して茲に謂ふ所の財産は唯に個人的財産を意味するものではなくして、單に市場に提供せられ讓渡せられ得べき財産のみを指示するのである。此等の財貨が貨幣にて表現せられ居る限りに於いては、上述せし貨幣資本概念と一致するものである。Beckertは財産なる概念中に利得を齎す關係 (Ertragsmöglichkeit) をも含

ましむるもので、此點に就きては、財貨の提供者より見れば交附せられたる財貨は一の關係—生産及び營利に關するもの—を惹起し、之れに由つて財貨の提供者に利得を齎すに至るものである。彼の言よりして、明白に知り得るであらう。以上よりして考ふれば彼れは財産なる概念を貨幣資本の意味に解し、流通的なる又利得を生み出す處の個人資本なりとすなす故に、既述の Spiethoff に對する批評を同一の批難を受くべきものなる事を、推論し得るであらう。兩者は共に目前行はるる處の經濟的行程、即ち之れに由つてのみ利子構成可能となり隨つて其の資本性を説明し得べき處の事實を、全く捨てて顧みないのである。Misesも貨幣の資本に對する關係を確定せんが爲めに、同一の觀察點に立つて貨幣を以て資本の構成要素とすして居る。貨幣が資本たる事を得るは、經濟主體に對して資本財貨獲得の手段たり得るが爲めである。貨幣が使用せられずして死蔵せらるる時は、貨幣は資本構成要素たる事を得ないものである。彼れは此の場合個人的資本のみを眼中に置き、貨幣を社會的資本概念中より除外するのである。

つて、彼れの觀察點の皮相的にして不充分的な事は、貨幣は他の經濟的財貨と交換せらるる事實よりして初めて生産的となり得るものとの、彼の主張よりして明白に看取し得る處で、即ち貨幣其れ自身としては營利の手段たる事なく、貨幣に對して交換せらるる財貨のみが營利の手段なりと、彼れは論ずるのである。

Spiethoff及びMisesの兩者は各其の理論に於いて、貨幣資本の根本的特質即ち利得を生み出すの能力を度外視して、彼等は市場

に於ける取引現象のみを注目して、資本の價值付行程に關する解折は、全然之れを無視するの缺點を有するものである。此の如き缺點は Marx に依つて完全に補正されたるものにして、彼れは資本の發達過程の各段階に於ける資本概念を解折して、貨幣資本概念をして可及的に其の真相に近づくしむるに、成功したるものである。

Marxは貨幣を以て資本が循環するに際して探る處の、一の形態なりとすのである。彼れは資本主義的生産行程を以て、資本の價值が貨幣資本生産資本商品資本の各形態に順次變形し、以て餘剩價值を創造して再び貨幣資本の形態に於て、資本家に復歸する處の循環行程— $C \rightarrow W \rightarrow P \rightarrow M \rightarrow W \rightarrow G$ —なりと説明せし事は、一般に知らるる處である。而して此の意味にて彼れは貨幣資本は貨幣狀態又は貨幣形態に於ける資本價值なりとすのである。貨幣資本は産業資本の一の職能的形態であつて、資本は流通範圍内に於いては此の形態を採り、流通範圍内に於ける特有の資本的職能をなすものである。貨幣資本は資本の一時的形態にして、他の資本形態たる商品資本及び生産資本とは區別せらるべきもので、貨幣は資本の再生産行程との關係の下に於いてのみ資本性を獲得するものなりとすのである。Marxの貨幣資本に關する根本的觀念は次の文章を見るに由つて特に明白となり得るであらう。貨幣狀態は資本の循環關係に於いて産業資本の探る形態の一段階をなすもので、貨幣資本は産業資本の循環行程内に於いては、貨幣的職能以外何等なすことなきものなるが此の貨幣的職能は資本循環の他の段階との關

係に於いてのみ、資本的職能として意義を有するに至るものである。

Marx が資本循環の一段階として考察し、吾人が純粹の貨幣資本を稱せんことを欲する處の上述の貨幣資本は、利子を生み出す處の資本即ち資金 (Moneyed capital) に對立せしめらるるものである。資本循環行程に於いて貨幣が作用する範圍内に於いて、貨幣は一時貨幣資本を形成するものであるが、此の如き貨幣資本は貸付資本には變化し得ざるもので、唯其れを以て生産資本の要素と交換するか、又は之れを具體化して流通手段としての存在を廢するか、何れかの方法に依つて利用せられ得べきものである。左れば貨幣資本は其の所有者に對して貸付資本と變化し得ないものである。

上述の所論及び之れに關連する處の他の論議よりして、次の事は容易に了解し得べきであらう。W—G なる經濟行為に由つて得られたる貨幣は、之れを他に貸付けて貸付資本として利用するか、又は G—W なる經濟行為に由つて財貨を購買し以て純粹の貨幣資本として使用するか、何れかの用途を有するものである。貸付資本と貨幣資本との區別は Marx の全く自覺せざりし處にして少くも之れに就きて彼等は何等説明せなかつたものである。然し例へば彼が流通手段としての貨幣に對して資本としての貨幣を對立せしめ、後者をば資本の讓渡即ち貸付業務に限定せしより見る時は、彼れも亦貨幣資本の一形態即ち貸付資本なるものを、承認せしものとも考へ得らるるのである。

(A) 吾人は最初に Marx の謂ふ所の純粹の貨幣資本概念なるものを考察して見よう。

G—W なる財貨の購買行為のみよりしては、貨幣が貨幣資本として作用するものなりこの事實は、之れを説明する事を得ない。以上の事實は購買行為を資本の生産的循環關係全體と關係せしむる事に由つてのみ、初めて説明し得るものである。購買行為は再生産行程の一要素をなすに過ぎないものである。即ち貨幣が貨幣としてのみ作用する處の購買行為が資本主義的の生産行程を嚮導する場合に於いてのみ、貨幣の資本性は考へ得べきもので、貨幣が商品に變形せらるる場合に在りても、賣却者との實際關係のみに由つて貨幣は資本となるものではなくして、主觀的には資本家の感念上の關係に於いて、客觀的には再生産過程の一要素となりて、貨幣は資本となり得るものである。Marx に隨へば貨幣が資本主義的の生産行程の連鎖の一要素たるが故に、資本となり得るもので、即ち貨幣は資本主義的の生産を基礎としてのみ、初めて資本と化し得るものである。

(B) 第二の形態即ち貸付資本としては、資本價値の讓渡に役立つものである、現金化せし資本又は現金化せし収入の何れを示すやを論ぜず、唯貨幣は貸付なる經濟行為を通じて貸付資本となり得るものである。自由なる資本は自らの生産行程に直接使用せんとする第三者に對して、貸付の形式に於いて之れを讓渡する事が出来る。貸付資本が純粹の貨幣資本と異なる點は、貸借當事者双方に於いて資本として前貸せられ資本として支出せらるるを必要とするに在りて Marx は貸借手借手の兩者に於いて資本として働き得る場合に於いての貨幣は貸付資本となり得るものであることなす。彼れは更に貸借關係に於いて、貨幣が交附せ

られ又返還せらるるの事實は、資本の實際上の循環と何等關係なきものであつて、資本循環行程は貸借なる行為と無關係に行はるるものである。貸付行為は各人の勝手に行ふものであつて、唯法律上の契約に依つて仲介せらるるものである。貸付者に貸金の返還せらるる事は一定の經濟的の先行行為の結果として生じ来るものではなく、特別の法律上の意思合致の結果と見るべきものである。左れば Marx は貨幣資本が化して貸付資本となる處の資本貸借行為は、非經濟的取引にして、唯法律的の性質を有するに過ぎないものなりと考へて居るものことなす事が出来る。然し彼れは他面に於いて貨幣貸借の經濟的性質を力説して居るのである。例へば貨幣は之れを以て財貨を賣買するの代りに、之れを貸與する事を得。左れば貸付は貨幣を貨幣として又は商品としてではなく、資本として他に讓渡する場合に採らるる形式であることなすが如き之れである。貨幣貸借は資本たる貨幣を商品として見れば、商品の賣却と性質を等しくするものである。其の場合の價値は利子に外ならない。商品の賣却に際して讓渡せらるるものは商品の價値には非ずして其の使用價値なること同じく、貨幣貸借の場合に於いては貨幣の使用價値が讓渡せらるるものである。而して貨幣の使用價値は、貨幣が資本に變形せられ資本として働き一定の餘剩價値を創造するの點に求むべきもので、貨幣に以上の如き自ら價値を維持し價値を増加して所有者の手に復歸するの特質が存在するものなるが故に、貨幣所有者は貨幣を資本として他に貸與し得るものである。

以上示せる所よりして Marx が貨幣資本に二種の形態存在し得るものなりとして、兩者

は共に商品及び餘剩價値を現金化するよりして生じ来るものなるが故に、兩者の區別は其の發生原因に求むべきものではなくして、貨幣資本を生産手段購買の爲めに使用するか又は利子を得て他に之れを貸與するか、何れの使用方法を採るやに由つて、兩者の別生じ来るものなりとす事は、充分知り得るであらう。前者の場合に於いては純粹貨幣資本生じ後者の場合には貨幣貸付資本なるもの生じ来るのである。貨幣資本を利用する事其れ自體が貨幣が貨幣資本として存在し得るの必要條件で、貨幣が上述の兩目的の何れかにも使用せられざる時即ち貨幣が單に一の財貨 (Schick) を形成するに過ぎない時には、彼れは之れを以て貨幣資本とみなさずして遊資 (brachligendes Kapital) に見るのである。即ち貨幣其れ自身としては單に潜在的資本たるに過ぎないものであるが、信用取引の發達は貨幣をして單なる財貨たるに止まらしめずして、全部之れを資本化せしむるに至るものである。要之貨幣は常に變化して餘剩價値創造に與る限りに於いて、資本たる事を得るものである。

Marx 學說の一大特徴は、彼れが交換經濟組織の連行生産行程の絶へざる變化の研究に全力を注ぎ、生産行程内に於ける資本が採り得る各種の形態を初めて分類したるの點に、存在し得るものである。多數の經濟學者がなせしと異りて、彼れは經濟組織の一形成を抽出して之れを研究の對象とはなさずして、彼の經濟理論中には經濟行程の全部が包含せらるるもので、彼れは經濟價値の循環行程を追究する事に依つて、經濟價値は種種の形態を探るものなる事を發見し、財貨の循環行程

に於いて財貨の探る一形態として、貨幣資本を見るのである。即ち彼れは經濟生活の靜態的觀察に對して動態的觀察を樹立せしむるものである。貨幣資本問題の解決に當つては、Marxの思索の深遠と觀察の鋭利なる事は之れを承認せなければならぬ。雖も、彼れのなせし問題の解決方法は充分なるものこは不幸にしてなすを得ない。彼れの失敗は次の理由に基くものである。

(一) Marxは經濟行程全體を資本の循環として觀察し、之を $G-W.P.W, G$ の式にて表現す、而して其兩端の G, G は資本の貨幣形態即ち貨幣資本を示すのである。資本に變化せらるべき貨幣の價值變動は貨幣のみに於いて行はるるものではなくして $G-W$ に於いて購買せられたる商品に由つて初めて生じ來るものである。價值の源泉なるべき特質を有する唯一の商品は勞動力に外ならない。此の勞動力を利用して餘剩價值を創造する事に由つて、貨幣は資本に化し得るものである。貨幣資本が生産資本に變形さるるに於いて、資本の價值は其の自然形態—財貨の形態—を採り、此の形態の下に於いては資本は流通せずして生産的消費に消費せらるるものである。生産的消費は勞動力の生む處の餘剩價值を通じて、餘剩生産をなさん事を目的とせずとも、生産的消費の結果として生産せらるる商品は、以前の商品に比しては實質的にも其の價值に於いても變化し居るものである。價值の變動は生産行程たる P なる變形 (Metamorphose) に依つて生じ來るもので、生産行程に於ける變形は、流通行程に於ける形式的變形 (formelle Metamorphose) に對して實質的變形 (reale Metamorphose) と見ら

べきである。即ち彼れは生産行程中に於いて資本が自然形態を探る間に、餘剩價值を創造するものなる事を意味して、之を除きて他の資本の循環行程は總て形式的變形を意味するに過ぎない。資本が其の形態を變化する事は、其れが實質的なるや又は形式的にのみ止まるものなるやを論ぜず、資本移動の全部を包括する處の資本循環行程なる連鎖の一要因を構成するものである。此點に於いて Marxは誤謬に陥つて居るものと考ふべきである。彼れが一の行程とし一の循環行程として觀察する處のものは、實際に於いては單一なる行程ではなくして種類を異にして併行する處の二の行程を含むものなる事を知らなければならぬ。一は經濟的技術的の現象にして、他は交換に由つて生じ來る處の一の社會的關係を示すものである。前者は財貨が生産せられてより其れが消費せらるるに至る迄の財貨の移動を意味するものであつて、後者は社會に對して商品の形態にて財貨を給付する事—賣却—に由つて發生し、市場に於いて他の財貨を獲得する事—購買—に由つて經濟的考察範圍より消失するに至る迄の間に於ける、社會的權利—社會的財貨に對する要求權—の移動を指示するものである。以上兩種の移動は Marxの考ふるが如くに交互に行はるるものではない。即ち一方が他方の結果として生じ更に又他方の發生原因となるが如きものではなくして、常に同時に併行して生じ居るものである。彼れが以上の如き區別を自覺せしが如くに考へらるるは、次の所説よりして明白となり得るであらう。生産資本を以て資本の自然形態と見、生産行程を實質的變形として流通的行程に於ける形式的變形に對して

彼れは對立せしめて居る。此の如き主張は更に次の如き言に依つても觀取し得べきである。富の社會的形態—貨幣素材としての金屬—は富の具體的形態以外に於いて、一の實在として存在し得るものである。

財貨の總額としての實物資本—資本財—は貨幣形態に於いて存在するものでない。此等の資本は種種なる過程状態を通じて遂に消費者の手に歸するものである。而して此等實物資本が往往にして貨幣形態にて表はれ來るのは、生産行程とは何等關係なきものであつて一の社會的現象として見るべきものである。即ち生産資本が貨幣形態を探るのは交換經濟より生じ來る處の必然的の現象にして、生産行程よりして生じ來る處の必至的の現象ではない。實質的具體的の資本が貨幣形態を探る理由は、資本が種種所有者の間を轉轉移動せられ、移動に際しては人人は資本交附の證明を貨幣形態に於いて得んことを欲するの點に、求めらるべきである。一方に於いては具體的財貨關係と他方に於いては人間が經濟生活を營むに當つて互いに相寄り相扶けざるべからざる社會的依存關係—貨幣に於いて表現される—の兩者を區別して考ふる事に依つて、一般的に資本價值の循環なるもの存在し得ざる事を注意せなければならぬ。即ち自ら支出する處の貨幣即ち G 、自ら購買する處の商品 W の間に於いて、内面的なる又實際關係に依つて定まる關係は存在せぬ。又反對に W と G の間にも何等必然的なる關係は存在しない。經濟的の意味に於いて全然異なる處の事物たる G と W の間には外見的の前後關係の存するのみにして、資本の利用以外は何等眼中になき資本家の立場よりしてのみ、兩

者の間に内面的に一定關係存在するものとして考へらるるのである。資本循環形式の根本をなす統一的要素として Marxは社會的勞動力を擧ぐるもので、價值創造の要素として勞働が、各種の資本形態の中に存する事に依つてのみ、此等の資本形態が價值を有し又價值として相互に比較し得らるるの理由を説明し得るのである。然しながら勞働の存在する事實のみよりしては各種の資本形態相互の間に、必然的の内面關係の存在し得べきの理由は説明し得ない。螟蛉より蝶となるに至る迄の形態の變化を解剖するに際して、此等各種の形態の全體の根底に有機的要素の存在するものなりを示す事に依つては、形態を變化せしむるの力の何物たるかを明かにし得ざるに等しく、資本形態の根底に存在する勞動力を以てしては、資本の各形態の内面的連絡は之れを説明し得ないものである。資本の形態の變化に於いて外部に表はれたる形態と形態の變化を惹起する處の内面的の原動力とは之れを區別せなければならぬ。 G と W は兩者に共通の統一的本質を有するものには非らず、又兩者は其の實質に於いても共通のたるものではないのである。

資本主義的生產行程に於ける種類を異にする處の各要素即ち生産資本商品資本貨幣資本は、唯利益の獲得にのみ集中する處の、資本家的の精神に於いてのみ内面的に相互に連絡を有するものであつて、經濟生活の實際に於ける客觀的狀態に於いて、此等のものは内面的に何等連絡せらるる處なきものである。即ち資本家の立場よりしてのみ、資本の循環行程なるものは存在し得るのであつて、其の理由は彼等の考ふる處に依れば、貨幣は餘剩價

値獲得の爲めにのみ市場に提供せらるるからである。産業資本 (Industrielleskapital) なる概念は資本循環行程を完成せる單一的現象として構成せんが爲めに Marx に依つて創造せられたるものご考ふべきもので、随つて資本形態が常に變化しつありこの思想が眞ならざるに至る場合には、資本形態の一としての貨幣資本なる概念も亦空ならざるを得ないのは、説明するの必要なものである。貨幣資本は資本の變形さるる形態ではない。此の如きは Marx に依つて主張せらるる資本循環の一過程としてのみ存在し得るに過ぎない。左れば先づ以て吾人は貨幣は資本なりこの事實を證明するの必要がある。Marx は貨幣は資本循環の一段階を示すものであり、貨幣の資本性は唯生産行程に於いて、即ち生産的資本に於いて初めて生ずるものなるが故に、貨幣は資本なりと説明するのである。然し若し貨幣資本が資本循環行程の一段階ならずとせば、貨幣資本は生産資本とは何等共通的特質を有せないもので、其れよりしては貨幣の資本性は類推する事を得ないのは明白であらう。換言すれば Marx に依つて想像せらるる資本循環の一要因として考へらるる限りに於いてのみ、貨幣資本も生産資本も資本形態たり得るに過ぎない。彼れの云ふが如き資本循環行程を實際に生ぜしむる處の原因は、資本家の利得獲得の欲念以外には之れを求むる事を得ずとすれば、生産資本貨幣資本なる概念も架空的なるものご化せざるを得ない。何ごなれば資本循環資本形態の變化を來さしむる處の、單一的の客觀的の要素の存在を缺くを以てである。

(未完)

●英國經濟學者消息

近著イコノミック・ジャーナル誌 (The Economic Journal, London, No. 139, 140) はイギリスに於ける著名な經濟學者最近の消息を詳細に報告してゐるが、其主なるものを摘記すれば次の通りである。

ジー・ディー・エッチ・コール氏 (Mr. G. D. H. Cole) 同氏は此度オックスフォード大學經濟科の講師に任ぜられた。在任期間七ヶ年の筈であるが若し同講師の「現在の經濟的秩序は今や崩壊に瀕しつつある、而も之が決定的崩壊は何十年後の問題ではなく何年後の問題である」と云ふ信念が正しいとするならば、同講師の任期が満つるまでに經濟學は資本主義的組織の廢止に依つて甚だ單純化されることになるであらうと云はれてゐる。

ゼイ・エス・ニコルソン教授 (Prof. J. S. Nicholson) エディンバラ大學の經濟學教授ニコルソン氏の辭任は昨年九月末に愈確定の事實となつた。其の爲めに同大學は千八百八十年以來有して來つた名講義を失ふわけである。此長期間に亘り同教授は其授業と、並びに其著書から反映された名譽に依つてのみならず更に經濟研究機關の組織に刺戟を與へたことに依つても同大學に貢獻するところ誠に大であつた。即ち教授の在任中其提案に依つて同大學經濟學科には經濟史の一講座、經濟學に於ける三の補助講座がつけ加へられた。又新しく商業學科が設立せられ此學科は會計及び商事經營學、企業論及び商業法の諸講座を有してゐる。更に學生数はニコルソン教授の在任中に實に十倍に増加した。しかし同大學が教授の辭任に依つて蒙る損失は其爲めに同教授が經濟學上の著作に重要な貢獻をなす爲めに一層自由な立場に立ち得ることから一般經濟界が受くる利益に依つて相殺せられるに相違ない。

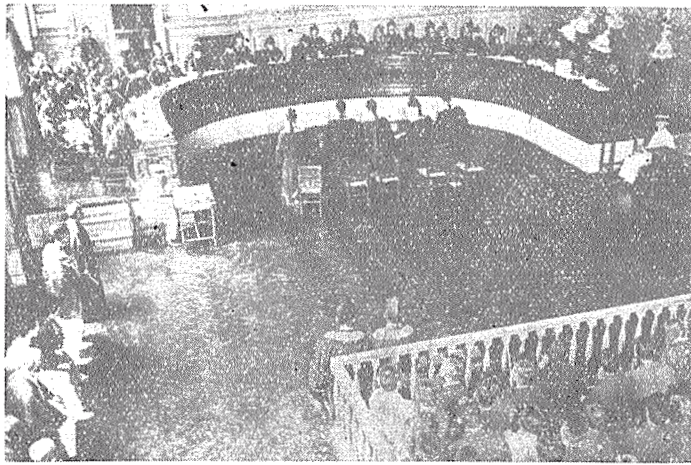
學 内 報

本學關係者の故柿崎氏墓參

舊臘二十九日元本學理事事故柿崎欽吾氏一周忌を迎へ、本學關係者一同は同日午後一時、阿部野墓地前開路社に集合し、墓前に參拜して英靈を訪ふた(挿繪参照)。

定時協議員會開催

去月二十九日午後四時から市内東區今橋ホテ、に於て定時協議員會を開催し大正十五年度の豫算その他を議定した。



最後に法廷に立てる故柿崎欽吾氏 (大正十三年七月三日、場所は大本醫院民刑聯合部法廷、立てる辯護士中の中央が柿崎氏)

千里山學舎に水道開通

今回本學千里山學舎に水道が開通し大阪住宅經營地の水源地から清水を導き得るに至つた



柿崎氏墓前に參拜せる本學關係者並に教職員

運動場工事進行

本學千里山學舎東隣の低地をトしてグリークシエター式の大運動場を建設せんとの豫ての計劃が漸く具體化し、昨秋より愈その工事に着手したが、着着進行して來る四月の新學年には既に使用に堪ゆる程度に達すべく、九月にはスタンドその他の設備も完成する筈である

第三學期授業開始

本學年度第三學期授業を左の通り開始した。學部各科各學年共 一月十五日

大學豫科各學年共 一月十五日
專門部各科各學年共 一月十五日

マーシャル論文集の翻譯と 同教授未亡人からの來信

本學が「マーシャル記念論文集——“Memoirs of Alfred Marshall”」の翻譯權を得たこと及び現に著者その業成り近く發刊の運びになつてゐることは既報の通りであるが、この報を齎らせた本學官島教授の書信に對し、マーシャル教授未亡人は左の如き喜びの返信を寄せられた。

Barriol Croft, 6, Madingley Road,
Cambridge.

30 XI, 25.

Dear Professor Miyajima,
Thank you for your letter of October, in which you say that the translation of the “Memoirs of Alfred Marshall” has already been begun and that it may be finished during the coming year.

Thank you also for the copies of your University Bulletin, containing the translation of Mr. J. M. Keynes' Memoir, one of which I propose to give to the “Marshall” Library.

Yours very truly,
Mary P. Marshall.

來學年度學生募集

大正十五年度の本學學生を左の通り募集することに決定した。
大學豫科第一學年

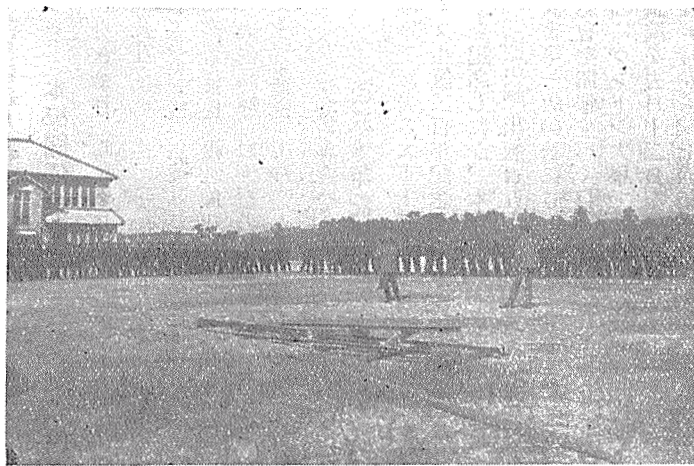
出願期間—二月十五日より四月五日まで
入學試験—四月七日より同九日まで千里山

學舎に於て施行
專門部各科第一學年

出願期間—三月一日より同三十一日まで
入學試験—四月二日及び同十日の二日間福

第一回本學軍事教練查閱

鳥學舎に於て施行

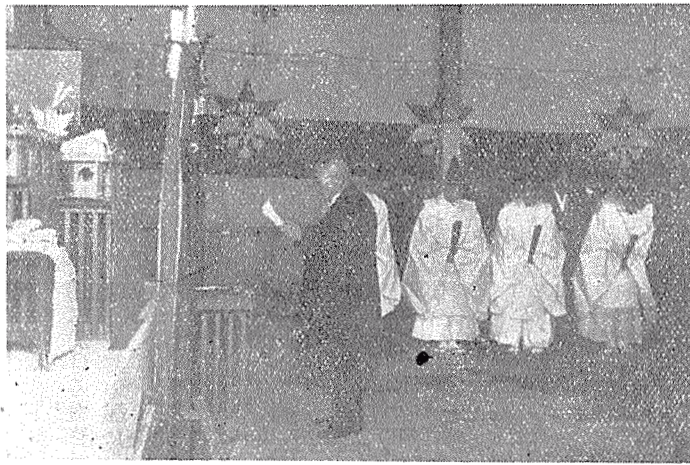


學舎に於ける第一回軍事教練查閱

本學軍事教練第一回查閱は去月二十七、八兩日に互り查閱官陸軍少將新井龜太郎、副官陸軍歩兵大尉毛利喬の兩氏出張、本學軍事教官横卷、田中、板津の三氏及び本學官島事務理事、木下幹事、松崎書記等立會の下に、千里山學舎學庭に於て施行せられた。第一日は大學豫科の、第二日は學部の、それぞれ規定の查閱を終へ、兩日共查閱官の講評があつて無事終了した。

本學功勞者追悼會

去月三十一日午後三時から、物故せる本學功勞者、吉田一士、井上操、有田徳一、小倉久北島治房、福原直道、齋藤十一郎、岡村司、澁川忠二郎、柿崎欽吾、河村善益等の諸氏の英靈に對する追悼會を本學福島學舎に於て、又同日午後五時からその記念晚餐會を市内東區大阪ホテルに於て、それぞれ左の如く舉行



物故功勞者追悼會

祭主拜禮、本學總理事祭文、玉串奉奠、撤饌昇魂行事、奏樂等神式に依る儀順を終へ、午後四時閉會した。

茲に我が關西大學に功勞ある物故諸賢の靈を招きて追悼の儀を行ふに當り、その事業を承繼して經營の任に在る我等は殊に感慨の深きものあり。

願れば本學創立以來年を閲するに四十年、その間學運日に進み業績月に上り、卒業生を出すに既に約五千、收容する學生生徒亦四千數百名を算す。盛なりと謂ふべし。

殊に輓近千里山の地を下して大學令に依る大學を設立し、法文及び經濟の二學部を置き更に大學豫科を併置す。又教授講師の數實に百數十名に及び、これら教授講師は内に在つては、熱誠以て學生を指導するに同時に、外に對しては常に著書論文を發表する等、學の内容漸く整齊の域に達せり。

かくの如き本學今日の盛大は實に物故諸賢の創意方針の象結なりと謂ふべく、即ち或は創立者として、或は理事者として本學のため致されたる軼掌盡瘁は相積み相合して本學今日の學勢を招來するの基礎をなす。想ひて茲に到れば本學の諸賢に負ふにこそ極めて大なり。茲に諸賢の靈を招き祭典を舉ぐるは、一に本學その歴史を重んじ、先人を敬慕する所以にして、延いて後進教化に及ぼす効果亦更に大なるを信ず。

我等は諸賢の遺圖を尊重し、益本學の進展向上に努め、以て聊か諸賢の功徳に酬ゆるに同時に、その偉業を永劫に傳へんことを期す。

英靈以て安んせよ。

大正十五年一月三十一日

關西大學總理事 山岡順太郎

追悼記念晚餐會

定刻故小倉久氏遺族小倉規一氏、故澁川忠二氏遺族澁川千之助氏、故柿崎欽吾氏遺族柿崎嘉男氏その他左記本學關係者並に教職員諸氏出席、デザート・コースに入つて、宮島事務理事は理事者を代表して挨拶を述べ、澁川千之助氏は遺族側を代表して謝するところあり、次で、渡邊菊之助、手塚太郎、山口房五郎等の諸氏もそれぞれ故人の追憶を中心とする本學創立當時の挿話に一同をして今昔の感に堪えざるものあらしめ、かくて午後八時頃和氣瀟瀟裡に意義深き集ひが閉ぢられた。

出席者(順序不同)

板垣不二男、井上正直、板津直俊、岩崎卯一、林龍太郎、戸田省三、沖中恒幸、大鐘彦市、渡邊菊之助、河村信一、賀來俊一、加藤金次郎、川崎齊一郎、神宅賀壽、吉田音松、吉崎龜之助、横巻茂雄、武内省三、垂水善太郎、辰巳經世、田川七郎、田中哲、内藤正剛、村上喜真、村松岩吉、黒田莊次郎、山口房五郎、松田一、松村敏夫、松崎義盛、藤澤章次郎、小泉幸治、腰高真雄、手塚太郎、櫻井匡、佐々穆、喜多村桂一郎、三枝樹正道、宮島綱男、水谷揆一、白川朋吉、新町徳之、樋口純、森川太郎、關豊馬、菅沼豊次郎、砂川雄俊、飯田清藏、山村喬、岩尾廉、中村良之助、山本四三、中村秀光、植松、下島、島田、菊池、長尾、稻垣等の諸氏。

第二商業學校彙報

四方拜賀式舉行

去る一月一日午前九時から同校講堂に於て舉行、教職員並に生徒一同參列、木下主事の式辭があつて散會した。

第三學期授業開始

去る一月八日午後五時から同校講堂に於いて

第三學期始業式を舉行し、翌九日から各學年共授業を開始した。 敬論新任

今回第三學年及第二學年英語科擔任として今山實氏を新しく招聘した。

本學關係者動靜

木村 清氏 本學擴張後援會長木村清氏は今回阪和鐵道株式會社創立當事者として同社創立事務に盡力しつつある。 下村耕次郎氏 本學評議員下村耕次郎氏は今回株式會社大阪鐵工所專務取締役辭任。

本學關係者慶弔

櫻井匡教授 昨年十月二十二日二女富美子嬢 出生

村上喜貞教授 舊臘八日長男醇君出生 宮島綱男教授 祖父倉知又七氏去月六日八十七歳の高齡を以て逝去

沖中恒幸教授 去月二十二日長男裕君出生

アダム・スミス「國富論」出版

百五十年記念會開催豫定

本學では去る大正十二年六月五日、アダム・スミス生誕二百年記念講演會を開いて碩學の遺業を記念したが、本年は又同氏不朽の名作たる「國富論」出版五十年に相當するが故に、同書第一版の公にされた三月九日を以て、記念會を開催すべく目下それぞれ準備中である因にロンドン大學では、右「國富論」出版記念講演會を去月十二日を第一回とし、毎火曜日午後五時から、七回講義を行ひつつある云ふ而して、その講師は左記七氏である。

- Edwin Cannan, I. Bonar, Morris Ginsberg, T. E. Gregory, H. J. Laski, Hugh Dalton, F. W. Hirst

校友の面影

大市電氣局運輸課 庶務係長兼乘客係長 今田光匡氏

明治三十九年法律學科出身

都市の活動に就いて交通機關は最も重大な役割を演じてゐる。わけて多數人が之を利する市街電鐵は恰も人體に於ける血管にも類ふべきであらうか。殊に産業の都たる我大阪に於いて此感は深い。即ち一日市電氣局を訪ふ



て心附くままに順序もなく其處に勤むる校友の數氏を尋ね、本學が市の交通事業の上に印する影を探ぐることにした。

氏は明治十七年德島縣に生れ、

青雲の志を抱いて上阪、傍ら裁判書に勤めつつ本學に通つた。卒業後幾何もなくして大阪市の電氣局に入り爾來一貫して運輸課に事務を執りつつある。温厚篤實の好紳士であつて實際の事務に明るく且つ一面經營の才にも長けてゐる。夫人との間に一男あり家庭の人々も氏の人格は期せずして其周圍を幸福に照り輝かしてゐるのであらう。未だ四十三歳は見えぬ艶艶しい双頬に柔和な笑を湛えつつ氏の談話は先づ氏が電氣局に入つた當時の

懷舊談に始まる。

「私が電氣局に這入りましたのは漸く二期線が完成した當時でありまして、即ち南北線では梅田から戎橋まで、東西線では谷町から築港まで位の線が出来てゐただけで今日の有様と比べるに實に今昔の感に堪えません。兎に角さう云つた様な状態であつて會社で云はば先づ創業當時とも云ふべき時でありましたから、事務についても分課と云ふやうなこともなく少數の人が色色の事をやつてゐたやうでした。其後仕事の分課が定つてから私は主として電車事故に關する仕事をやつてゐました。

今田光匡氏 今田光匡氏 今田光匡氏 今田光匡氏

及ぼした場合のこゝでありまして、電鐵事業全體の上から見ますと一見餘り重大でないやうに感ぜられますが、小さい會社なごでは此賠償金の爲めに倒産する等のこゝも随分あります。殊に近頃は一般の思想が變りまして法律上でも無過失賠償の責任等と云ひますから今日では寧ろ斯業に於ける最も困難な仕事の一となつてゐる有様であります。しかし全體として近頃は斯くの如き事故の件數が運轉車數に比例して甚だしく減少したや

うであります。其原因は云ふまでもなく一般乗客並びに公衆の側に於ける自覺——これに就いては各種團體及び當方の宣傳等も多少與つて力あつたわけですが——に基くことも確かですが、又一面乗務員の側に於ける自覺も熟練に負ふことも少くあるまいと考へられます。吾等もしましても乗務員の過失に就いては随分之を防止する爲めに考を致しまして最初は嚴重な制裁其他の制度を設けたりしましたがこれは餘り効果がなかつたやうであります。寧ろ矢張り乗務員を精神的に誘導して自發的な注意力

道徳心なきに訴へることが必要で最近では着着此方面に力を盡してゐます。そして思ふに此事實は更に推し擴めて一般の労働者運動に對しても當てはまるのではないでせうか。一昨年の爭議以來市電従業員が進んで來た經路を振返へるに殊に此感を深うします。即ち吾等が従業員を指導啓發する意味で作りました自助會は近く純然たる労働組合に改造せられる筈ですが上述の意味に於ける同會の使命は完全に果されたものと信じてゐます。云云

因に氏は市電自助會設立以來其副會長として労働者教育にも力を盡して來た人懋むらくは此方面に於ける氏の蘊蓄を充分ここに紹介する餘裕のないことである。

▲大阪市電氣局長 義道氏▼

明治四十二年商業學科出身

氏は大阪に生れて大阪で育つた生粹の大阪兒本學卒業後直ちに電氣局に入つて今日に及ぶしかし煩雜な事務を右に左に恰も快刀亂麻を斷つての勢で處理して行く手腕の奥には良い意味での江戸つ子氣質も多分に含まれてゐるらしい。九條の市電氣局内の一室の様に積まれた書類に俊敏な點檢の目を走らせながら、大阪人は思へぬ齒切れのよい口調で語る。



長 義道氏

「御覽の通り俗務に追はれ通しですので到底思

索だの研究だの云ふ時間がない。従つて之を云ふ纏つた御話なんか出來つてありません。この仕事ですか？前は保健課に云つたん

ですが今は労働課に云ふことになつてゐます。そして労働課の内部が更に保健係と労働係の二つに分れてゐるわけです。將來は名前の示す通り労働に關する人事一切の仕事、換言しますと現業員——吾等の方では電車の乗務員及び各發電所や工營所の工夫、職工全體を引つくるめて斯う呼んでゐますが——の任免、昇級其他之等の人の福利増進に關する一切の仕事をやつて行く筈であります。目下のところでは斯う云ふことに關する實際的業務は殆ど凡て各現業員所屬の課でやつてゐまして

ここでは唯其方から廻つて來る書類を通して第二次的の仕事をしてゐるに過ぎないので一口に云へば現業員の待遇は近頃非常に改善せられました。乗務員の待遇なんかは恐らく日本中で第一等とせうし、職工の方にも勤続手當がつくやうになりましたから給與の點については随分いい方なんです。しかし一面其仕事の方を考へますと乗務員にして見れば郊外電車のように驛には驛掌が居り面倒な乗換なんかがないのは大分違ひますし工夫にしても一つ間違へば生命を失ふやうな危険な電氣作業に従事するので考へれば未だ給與の點についても考慮の餘地は少くないことと思ひます。けれど此問題は何も云つても財源の問題に引つかつて來ますし、さうか

云つて公共事業ですから無暗に乘車賃を上げて之を補ふ云ふやうなことも出來ず其間のかね合ひが随分難しい問題でせうね。殊に實際の仕事に携つて痛感します。これは役所仕事だけにせうしても經費支出の方法が規則づくめになつてゐますから私營會社に於けるやうに比較的自由に金を動かすことが出來ない點です。理論上は兎に角實際に當つて見ますと目に見えない金が労働爭議の解決にでも又其外のことにも随分有効に働くものでして、比較的自由に之を運用し得る私營會社は結局比較的小額の資金で能率を擧げ得ることになるわけです。さうです、少くも此點のみについて云へば私營は公營に勝る云ふことが出來るでせう……」

輕く口を閉じた氏、其眉宇に流れる一抹の精氣は若し氏から一切の官僚的責任と地位を排除したならば更に滔滔論するところあるであらうことを思はしめた。年齒未だ四十、將來氏に依つて爲さるべき事業の多くあることを吾人は信じて疑はぬ。幸ひに自重せられんことを。

校友彙報

校友會名古屋支部發會式

名古屋在住校友の間にはかねて校友會名古屋支部設立の議があつたが先般本學創立四十週年記念學術講會の爲めに學長一行が來名せるを迎へて愈其機熟し昨冬十二月十三日午後四時から同市河よし樓に於いて其發會式を擧げた。會するもの二十餘名、學長、教授の一行中よりは宮島、小泉の兩教授大學を代表して出席し、快談數刻に及んで何れも名残を惜しみつつ散會した。因に同支部支部長には同市在住の辯護士大原敬藏氏が擧げられた。

法曹黎明會成立

大正十一年度以後に卒業した京阪神地方在住の校友であつて現に判檢事辯護士其他法曹關係の業務に携つてゐる者は可成りの多數に上るが、未だ之が統一的連絡機關なきを遺憾とし馬場次郎、西本寛一、辻野新一、福岡福一、上田武雄の諸氏は昨年五月西本寛一、花本春憲兩辯護士の結婚祝賀會を機會に之が實現を期するところになり爾後着着準備を進めつつあつたが、愈其準備整ひ、昨年十一月二十一日寶塚勝之家に於いて其發會式を擧げた。會則は左の通りで現任幹事は馬場次郎、花本春憲、西本寛一、福岡福一、藤盛壽一の五氏であるが、同會では會の名稱は兎に角として一般法科出身者の入會を切望してゐる。

法曹黎明會會則

第一條 本會ハ法曹黎明會ト稱ス

第二條 本會ノ目的左ノ如シ

一 會員相互ノ親和敦睦ヲ圖ルコト

二 會員並ニ其家族ノ慶弔事ニ際シテハ相當方法ヲ以テ之カ儀禮ノ意ヲ表スルコト

三 會員相互ノ研究ヲ發表シ社會問題ノ討究批判及實際運動ヲ爲スコト

第三條 本會ハ大正十一年度以降ニ係ル關西大學校友ニシテ京阪神在任ノ有志ヲ以テ組織ス

但シ幹事會ノ決議ヲ以テ其他ノモノヲ入會セシムルコトヲ得

第四條 會員ハ毎月金壹圓也ノ會費ヲ納付スルノ義務ヲ負擔シ一旦納付シタル會費ハ中途退會其他如何ナル事由アルモ其返還ヲ求ムルコトヲ得

第五條 新ニ入會セントスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ要ス

第六條 會員ハ何時タリトモ退會スルコトヲ得

第七條 本會ハ毎年春秋二期ニ於イテ定時總會ヲ開キ必要ニ應シ臨時總會ヲ開ク

第八條 總會ノ決議ハ出席會員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス、但シ全會員ノ三分ノ一以上ノ出席ナキ時ハ議決スルコトヲ得ス

第九條 本會ニハ幹事五名ヲ置キ總會ノ決議ヲ以テ之ヲ選任ス

第十條 幹事ハ本會ノ事務一切ノ處理ヲナス

第十一條 幹事任期ハ一ケ年トス、但シ再選ヲ妨ケス、若シ其任期力最後ノ定時總會終結前ニ終了スル時ハ其總會ノ終結ニ至ルマデ之ヲ延長スルモノトス、補缺選任セラレタル幹事ノ任期ハ前任者ノ殘期間トス

第十二條 幹事ハ毎定時總會ニ於イテ會計報告ヲ爲スノ義務ヲ負フ

校友動靜

芝田政治氏(明四四法) 株式會社安田銀行兵庫支店に轉ず。

西 長市郎氏(大一一商) 第五回文部省實業教

員檢定試験に於いて商事要項科に合格した
杉本幾太郎氏(大二三法) 従來勤務中なりし萬朝報社京城支局を辭し大阪市東成區中道町一二七二に住所を定む。

池島源之丞氏(大二〇法) 去る一月十六日前市會議員中島米吉氏夫妻の媒酌で船場警察署長石塚大藏氏令嬢婦美子氏を市内靱大神宮に於いて華燭の典を挙げた。因に新婦は信愛高女出身の才媛で其父君石塚氏も亦本學の校友である。

今福伊三氏(大一二商) 今回黒川商店に入り調査部に勤務することになった。

松本 茂氏(大一一商) 目下普蘭店公學堂に勤務中。

諏訪賢三郎氏(大二三經) 岡山縣兒島郡小串村大日本人造肥料會社岡工場に轉じた。

富田英雄氏(大二四專經) 今回近衛歩兵第三聯隊第六中隊に入營した。

星野俊一氏(大一一法) 九州大學法文學部圖書館に勤務、福岡市外箱崎御茶屋跡三一六八に住居。

片山 昇氏(大二四專法) 去る一月九日小林佐和子嬢と結婚して居を神戸市外岩屋字屋形九二一に移した。

馬場次郎氏(大一一法) 今回東成區中道町三五八に法律事務所を移轉した。

駒杵秀男氏(大二四專法) 今般一年志願兵として丸龜歩兵第十二聯隊第十一中隊に入營した。

西山正雄氏(大二三法) 京都市上京區烏丸二條上る八千代生命京都支店に勤務。

小鹿義治氏(大二四專法) 一年志願兵として岐阜歩兵第六十八聯隊第一中隊に入營した

川島貞次郎氏(明四三法) 市内東區北濱二丁目

福壽火災保險株式會社に入社。
北坂正三郎氏(大二四專商) 去る一月二十日和歌山市九番丁九番地に於いて會計士事務所を開設した。

中山幸市氏(大二三商) 此度神戸高等商船學校に勤務することになった。

森 明光氏(大一一法) 住吉區北田邊町四三六桃山中學校前

堂本源吉氏(明三〇法) 横濱市子安町字大口一四六六

深瀬義彦氏(大一一商) 京都市外深草町石峰寺山一

芝田政治氏(明四四法) 神戸市熊野町一丁目一〇

乾 英一氏(大一一商) 東淀川區北長柄町三四〇

野々村 弘氏(明四四商) 朝鮮木浦府明治町一一

林和四郎氏(大一一法) 東區内平野町二丁目一二

木村順一氏(大一一商) 浪速區惠美須町二丁目六三

井上和夫氏(大二四專商) 港區八幡屋町二丁目五六森氏方

佐伯辰巳氏(大一一商) 神戸市六番町三丁目五三ノ二藤野方

森 英之助氏(明三九法) 天王寺區上沙町二丁目二〇

佐藤芳太郎氏(大一一商) 西區土佐堀通一丁目大同生命ビルディング八二四室

宮島晏夫氏(大二四專法) 京都市今出川通寺町東入仁田山旅館

松本 茂氏(大一一商) 南滿洲普蘭店公學堂官舎

寺島由松氏(推) 大連市霧島町一四〇

梶川多三郎氏(大一一商) 上海川路五五號日華紡織株式會社

上田市郎氏(大二四專經) 神戸市磯上通二丁目一日本藤工業所内

小川言吉氏(大一一法) 西淀川區大仁町三二ノ一山口氏内

山本武次太郎氏(大一一經) 東淀川區十三兩之町九〇九
梶川善太郎氏方

佐津間秋夫氏(大一一經) 京都市上京區烏丸二條上ル八千代生命社宅

森川太郎氏(大一一商) 尼崎市別所村字鳥ヶ池一六四ノ一

阿部新一氏(大二四專法) 東京市京橋區木挽町一丁目一平井恒之助氏方

中山幸市氏(大二三商) 武庫郡本山村字森四〇五ノ二

中内秀次氏(大一一法) 兵庫縣姬路市五軒邸中ノ町一二五福井氏方

桂 忠雄氏(大六法) 大阪市外吹田町字船橋一三〇八

校友改姓名 (舊) 喜七 (新) 喜七

校友逝去 大正十四年十二月二十日 東京府澁橋町角第六三八 鹿野外次郎氏 明治三十五年法律學科卒業

大正十四年十二月十七日 兵庫縣姫路市西魚町二四 小林農夫也氏 大正十二年法律學科卒業

大正十五年一月二十三日 大阪府北區梅田野阿部野組連總部 山口潤氏 明治二十三年法律學科卒業

大正十四年十二月十七日 大阪府西區江戶堀南通一丁目板野方 辯護士 平野利吉氏 大正十二年法律學科卒業

右訃音に接し謹んで弔意を表す

學生彙報

第七回工業見學

十二月四日大正十四年最終の工業見學として此花區大開町東洋鐵伸銅株式會社を訪うた。同會社は海軍指定工場として其製品は鑄、壓、棒、管等何れも既に噴噴の定評ある處である。同日は専務の詳細なる御説明の下に工場内各部を見學し獨特の機械、熟練なる職工に由つて優良なる製品の作り出される各種工程に就て書物講義以外の活智識を得た、特に緊張力試験機、押出機、小吹製煉法等は作業豫定を變更し我々の爲めに見學の便を與へられたる事は衷心より感謝する次第である。終りに同社専務及諸工場員諸氏の多大の御厚情に對し御禮を申上げる。

第八回工業見學

一月二十二日西區岩崎町大阪瓦斯株式會社岩崎工場を見學した、實地作業を見且つ工務員の詳細なる説明を聞きながら順次瓦斯發生爐、瓦斯清淨裝置副産物製造工程等を見學し、大阪二百萬市民に光及熱のエネルギーを供給する大工場の不休なる活氣不斷なる精力の溢れる景圍氣にひたつて化學工業者の文化生活に對する大なる功績之を理解し稱讚し感謝する事は現在未來に亘つて一般人の忘るべからざる義務である事を適切に感じた、終りに河村講師以下見學團一同は同會社及び同工場諸員が御多忙中に係らず種種斡旋せられたる事に對し深い感謝の意を表してゐる。

先輩送別歌談會

千里山短歌會では昨冬十二月三日午後二時から千里山學舎第二十三教室に於いて先輩送別歌談會を開いた。來會者は新町教授を始め二十數名に上り頗る盛會であつた。先づ出詠歌に就いて相互の批評を行ひ、後森畦君の開會の辭に依つて歌談會に移つた。劈頭同君は送別の辭に併せて「歌は作るものではなく詠むものである」とする上木君の主張に對する感想を述べ、次いで牧山君の興味深い千里山短歌會回顧あり、北村女史の挨拶等あり、終つて上木君は「藝術と人生」と題して一場の講演を試み一同傾聽した。最後に新町教授は本日の所感として即詠を發表せられ森畦君之を朗詠した。かくて暮色漸く室に滿る頃和氣霽霽裡に名残の「彌榮」を三唱して散會した。

千鴨會送別宴開催

京都から毎日十里の道を遠しませず千里山學舎に通學してゐる學生諸君に依つて組織せられてゐる千鴨會では昨冬十一月二日午後六時から本年の三月に卒業する會員平野清、牧山儀平、上木樂羊の三君の爲めに四條通り「くづ家」に於いて送別の宴を張つた。會する者十五名、森畦君在學生を代表して送別の辭を述べれば上木君卒業生を代表して之に對へ宴に入るや送るもの送らるもの何れも心から打解けて過去を語り未來を談するの有様は涙ぐましいばかりであつた。かくて歡談數刻記念の撮影を終へて後母校に京都通學團の萬歳を三唱して會を閉じた。

千里山野球部報

千里山野球部は去る一月三十一日北野中學校校庭に於いて大阪毎日野球部ミラグビー蹴球戦を催ふした。大毎軍のキツクオフで午前十二時三十分から開始したが後半戦に入つてから本學側猛然に攻撃に移り遂に八對零で本學の勝に歸した。

第二回中等學校驛傳競走

既報本學千里山陸上主催大阪毎日新聞社後援の第二回全國中等學校大阪實家間往復驛傳競走は去る一月十日盛大に行はれた。定刻午前九時参加選手一同は先づ大阪Y.M.C.A.に集合し前年度優勝校である郡山中學片岡主將からの優勝盃返還式あり、甲陽關甲の棄權校を除いて選手十六名は十時會館前のスタートを切つた。斯くて各選手は折からの寒風をつんざいて往復六區に區切つた豫定のコースを疾走し輪贏を争つたが結局前年度の優勝校である郡山中學(片岡、保井、安本、中辻、喜多、鶴丸)が全區間三時間四十二分五十三秒八三云ふ記録を以て再び優勝した。右競走終了後午後三時から選手並びに關係者一同をY.M.C.A.大集會場に招じて表彰茶話會を開き優勝校郡山中學に大阪毎日寄贈の優勝盃及び第五等までの各校に本學記念メダル並びに左記の個人賞資格者(各區間を最も速く走つた)に大毎メダル、其他参加記念品等を授與し郡山中學の謝辭あり、一同萬歳を三唱して散會した。時に四時。

因に個人賞受領者並びに参加校各區間の到着順は左の通りであつた。

【個人賞】第一區三十五分鶴見(郡山)△第二區三十六分五十秒石川(岸中)△第三區三十一分五十七

秒中辻(郡山)△第四區三十五分宮本(郡山)△第五區三十五分三輪(姫路)△第六區四十五分二十秒角谷(神港一)

各區間到着順	
郡山	姫粉伊名名
山中	路河都育商
一	1 5 8 4 7 2 3 6 6 11 12 10 10 13 16
二	2 1 6 5 7 3 8 4 14 14 9 9 10 10 13 16
三	3 1 2 4 5 8 3 3 7 6 4 14 14 9 9 10 10 13 16
四	4 1 2 4 5 7 3 6 6 8 8 11 13 14 10 10 10 10 13 16
五	5 1 2 3 4 6 5 7 7 8 8 11 9 9 10 10 10 10 13 16
決	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

ラ式蹴球部報

千里山ラ式蹴球部は去る一月二十日午後二時半から鐘紡淀川運動場に於いて大阪齒科醫專ラグビー部と同部設立第一回の試合をなした。レフェリー北地氏の下に齒專のキックオフで開始したが本學側終始敵を壓して遂に十五對三で勝利を得た。當日の陣容は次の通りであつた。

【大齒】1、森田2、井上3、長井4、勝部5、那須6、遠藤7、木下8、楠9、北田10、田中11、島12、北13、米林14、小石15、篠原

【關大】1、吉田2、山村3、増田4、小林5、齋藤6、中島7、藤井8、池田9、重田10、原田11、有賀12、瀧川13、三谷14、能勢15、松田

越えて同二十四日午後二時半から阪神甲子園グラウンドに於いて全關西軍と戦つた。レフェリー中村氏、全關西の先蹴で開始したが敵の攻撃猛烈を極め結局二十六對零のスコアで本學側敗れた。

福島野球部報

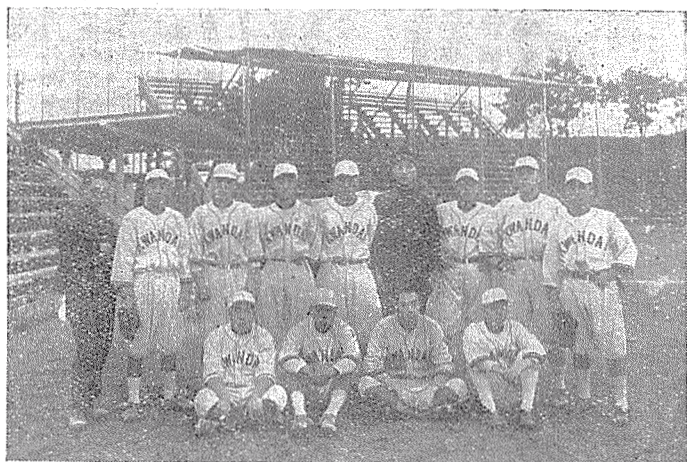
福島野球部の復活其活動の概要は前號所報

の通りであるが其後の對外試合は次の通りである。

對米國女子職業野球團戰

昨年十一月四日午後三時三十分から阪神甲子園に於いて女軍先攻で開始したが、我軍の打

福島野球部員一同



撃よく振ひ日没の爲め五時二十七分七回目にて終了したにも拘らず結局二十四A對一の大スコアで本學の勝ちこなつた。

對大毎混成軍戰

昨年十二月六日京阪寢屋川球場に於いて三木川越兩氏審判の下に舉行、午後一時四十分大毎の先攻に開始し、我軍善戰努めたが遂に及ばず十三對五で敗れた。當日兩軍の陣容は次の如くであつた。

每海(兄)	大内
内海(弟)	P 藤井
邊	3P 渡
川	1B 森
木田	SS 井
野林	C 鈴
村田	2B 村
内海(兄)	LF 平
	RF 若
	五百城
	佐伯

學	飯田
伯	森
脇	打
本	打
SS	佐藤
1B	森
3B	五百城
LF	境
RF	大北
SS	品川
2B	北井
C	本
B	二

千里山歌壇 編輯局選

先輩送別短歌會詠草

千里山ざくろはうれぬ取りに來よ嵐吹かぬまでに來よ友
堤 赤星

秋深む奈良の宮居の杉木立妻戀ふ鹿に人ぞ戀しき
藤枝きさを

アセチリンの灯影ゆれゆれ露店の町を湯上りてわが行きにけるかな
森 睦 孝夫

空想より醒めてさびしさ机の上に銀の時計の灯にきらめく淋しさ
服部みのる

風しけききび日に照る冬野原何はなしに安けてゐる
上木 樂洋

冬籠り春近づきし今日の日のまぎひうれしき
新町 教授

心今しむじみさびし忘れじな忘れ給はじ今日
森 睦 孝夫

のまぎひを
菊 也

これつきり死んでゆくかも知れないまじり思ふて涙ぐみにき
菊 也

湯上りの咽喉が渴きて停車場の前で五錢の密柑を買ひぬ
高原 草路

うららかに陽はてりにつつ風さむき霜月をはりもみぢを訪ぬ
高原 草路

楓林に出會ひし兒等よ其のひみり空氣銃をもちり小鳥をさがしつ
折折のうた 高原 草路

兒等はなみてころは滅ぶこのしじま眞書をしんご秋の陽はさす
折折のうた 高原 草路

紅き葉に夕陽ははえてひみ聲を小鳥なきたりあはしづかなり
折折のうた 高原 草路

教え兒も大きくなりぬ四年ぶり學校にかへりてあへる兒供等
折折のうた 高原 草路

四年ぶりのこの校庭にわが立てばなつかしける兒等のほほえみ
折折のうた 高原 草路

夜ふけて厠に立ちし醉眼に南天淡く見ゆる雪かな
折折のうた 高原 草路

寒村の處女總會にニイチ工説くわがA君の眞面目さをみる
折折のうた 高原 草路

木曾路の雪降る驛を急ぎ行く男女學生の多き朝なり
折折のうた 高原 草路

學友會雜誌「千里山」發刊

千里山學友會雜誌部の事業として今回雜誌「千里山」が發刊せられることになつた。同誌は菊版約百頁の冊誌で教授講師の諸論文を始め學生論文並びに一般學生の文藝作品をも載せる筈になつてゐる。年四回發行の計畫であつて創刊號を來る二月二十日前後に出す豫定の下に目下黒柳章、服部實、森睦孝、加藤等の委員諸君が準備其他に就いて熱心に奔走中である。尙ほ雜誌部長としては新町講師其任に當り委員一同を指導監督するつもりになつてゐる。

【大學小話】

Universitätsgeschichten.

Als der verstorbene Hallenser Nationalökonom Conrad einmal in seiner Vorlesung eine Studentin Zeitung lesen sah, drückte er der Dame nach Schluss des Kolleggeld (ein Zehnmarkstück) in die Hand und bemerkte: „Ich wünsche Sie nicht mehr in meinem Kolleg zu sehen.“ Das nächste Mal sah er vier eifrig Zeitung lesende Studenten zu seinen Füßen.

(Hamburger Nachrichten) (要譯) 物故したハルシの經濟學者コンラッド教授が會つて講義中に一人の女學生が新聞を讀んでゐるのを見付けた。そこで彼は講義が濟んでから其婦人の手に聽講料十マルク貨一個を握らせて云つた。

「以後はさうぞ私の講義に出て下さいませぬやうに……」
其次の講義の時彼は自分の足下で熱心に新聞を讀んでゐる四人の學生を見出した。(近着ハンブルグ時報より)

學生寄稿

人口の集中

經濟學部經濟學科 德久俊次譯
第一學年

此文は署名者が統計學の一研究として
Essays in Applied Economics, by A. C.
Pigou 中の一論文 "The Concentration
of Population" を翻譯し經濟學部統計
學教室に於いて報告せるものである。

運輸の進歩と資本の擴大とは大なる地方的集團に
人口を多く集中せしめた。元始時代に於ては凡て
の國の住民は國全體に擴がり、各宛にも角にも自
立して居る小なるグループに點在した。然るに現
代にては人口の大部分は全人口に比して、各大き
いグループに傳はれる傾向がある。而して此の集
中は現在存して居る如く歐米の大なる産業國に於
て尙一層行はれた。此の文の目的は人口の集中が
何に原因するかを明にするにある。吾等は人人の
労働の集中が彼等の住居の從つて生活の集中をも
含んで居るか云ふことを確めることより始め
る。

實際の事實として直ちに明になる如く此の關係は
必然でなく實際住居より労働の場所をばなすこと
の可能性と云ふことは一の重大なる社會的事實で
ある。
其れにしても労働が多く集中されれば同時に他の
影響は住居をより散在させる原因となるが然し仕
事をさせる影響は其れだけ住居の集中をもなさせ
る、故に他の事情は同一として私が今論議すべく
持出した原因は即ち労働の集中に影響する所の原
因は明に又住居の集中をも起す原因として取扱は
れる。農耕技術の状態が未だ原始的なりし時代に
は社會に於ける實際に働く時間の凡ては土地より

食物を得る労働に費され人口集中と云ふ現象は見
られなかつた。殆んど全部の人人が農耕に従事す
ると云ふ場合には労働は作物の最も生産的な方法
に國全體に散布せられねばならなかつた。又明に
小面積の土地に労働を大いに集中すると云ふこと
は收穫の遲減する傾向に從つて同量の労働を廣い
面積になすよりも收穫が少い。此の事はモリソン
卿の指摘せる如く印度と英國に於ての住民の異つ
た分布状態の主要な理由であらう。

「土地を耕す爲には人人は散在して居なければな
らぬ故に印度にては人口は國の全體に兎に角一様
に散布されて居る。然し英國では數個の大都會に
集中されて居る」
(The Economic Transition of India p. 8)

耕作技術が進歩すると土地より食物を得るために
費さるべき社會の労働の時間の比率は減少される
殊に最近半世紀間に於て機械が完成又は發見せら
れ而して其れが一般的に使用される様になつてよ
りは農産物の一定量は人人の甚だ少き勞力にて得
られることが出来る様になつた。其の上この進歩
には二方面がある。即ち一方は新しき工夫の採用
に依つて一定量の食物を産出するに要する實際の
勞力が減少されることである。然し他方は此れよ
り以上であつて一は新しき機械の製作に他はその
運用に費すこと云ふ如く勞力を二部分に分けること
に依つて今尙食糧生産に用ひられて居る勞力の大
部分をして間接に用ひしめ其れを供給する人人に
實際に野に接する必要をなからしめること云ふこと
である。斯くして食物を得るために直接間接に費
さるる社會の労働時間の比率は低下され又農業固
有の作業に用ひらるる時間の比率は尙一層低下さ
れる。此で労働時間の大部分は農業の如く必然的
に其の従事者を散在せしめざる事を要せざる他の
職業に自由に用ふることを得る。で多くの人人に
取つて其の従事して居る仕事の性質に依つて以前
よりも集中が全く相容れぬものではない様になる
然しながら尙他の原因に依つて妨げられて居る。

人人が農業に従事して居ると否とに拘らず凡ての
人人は農産物を必要とする故に只廣き面積の土地
の耕作に依つてのみ得らるる此等の産物を與へら
るる非農業者——此れは農業者より少くはないが
——は運輸の有力なる方法が進歩する迄は散在し
て居なければならぬ。假令如何に彼等の仕事に集
中が利益ありとしても此等の利益は農業に依つて
生産さるる食物を比較的安價に且つ敏速に集め又
分配する方法が進歩せざる限り人口集中をもたら
し得ない。此の事は農作の方法の進歩と同様に人
口集中の根本的條件である。

「此れをさておいてはかつて一般に行はれ今尙印
度に大に行はれて居る自給自足村落の制度が必
要である」

凡ての人が農作に従事すると云ふに非ずして其の
社會に供給せらるべき食物が得られ得る農作方法
と進歩せる運輸設備との二つの條件がある時大
なる中心に仕事の集中が尙傾向も自由に振舞ふこ
とが出来ぬ。而してその強さは此の種の集中の經
濟的利益の程度に掛つて居る。少數の地域に集中
して居る人人に有用なる貨物を供給する限りに於
てそれは明に利益である。例へば石炭は特別の地
域に發見される故にその結果採掘の仕事は其の地
方に集中されることは避くべからざることである
其の上社會が尙多くの石炭を要する時は石炭産出
の産業の材料又は原動力が地方的に局限され、運
輸が困難である限り其等が發見せらるる土地に其
等を利用する産業が集中することは産業に取つて
明に又利益のあることである。急速に落ちる水が
機械力の原動力である場合に此の力を必要とする
産業は電氣の發明以前は瀧の附近に集中されるこ
とに限られて居た。と云ふのは費用が少なくかか
るばかりでなくその力を何處にでも移すと云ふこ
とは物理的に不可能であつたからである。同様に
石炭利用の最初の頃は運輸甚だ遅く又困難であつ
て仕上げられた生産物の量に比して石炭の大なる

容積を必要とする如き産業は何處にても産出され
る。他のかさばつた或る材料を利用するに非ざれ
ば炭坑附近に實際に於て集中されることに限られ
て居る。

運輸の進歩に伴つて原動力や生の原料の源泉地の
附近に産業を集中せしめて得らるる利益は大いに
減少した。例へば前述の石炭の場合に於て國中到
る所安價に且つ敏速に運搬することが出来又は炭
坑に於て生ずる所の石炭に貯へられた力を變へて
電氣の形で遠く運ぶことが出来れば炭坑の附近に
工業を集中せしめることは——尙幾何かの利益は
あるが——最早優越的利益を生じない。

分散を促進させる影響——その中の最も重要なも
のは人口の密度の調査な場所の土地の値段の高い
ことであるが其れが感ぜられて来る。最早一つの
力のみが働くのでなく相反する力の平衡が現は
れる。

生産に關する其の要素は曾つてはさうであつたが
——又今も尙重要ではあるが——最早地方的集中
の主要原因でなくなる結果となる。

此の最も顯著なる原因は一に分配といふ事に關し
て居る即ちいくらかの異つた土地の間の交通機關
がある中心地を作りそこから道若しくは後代に於
ては鐵道が凡ての方向に四方八方に廣がることに
依つて最も安價になされ得るといふ事實に在る。
若しも國中到る處何等特別の用意なしに一つの所
から他の所へ移動することが出来るならば分配
の中心と云ふものは最早必要ではない然しながら
一般に移動と云ふことは道を作ることを必要とす
る。國の凡ての一對の地を正しく、各の道で連絡
すると云ふことは理論的には可能であるが然し作
ら比較的小数の中心地が本道に依つて聯絡される
ならば明により少い哩數で済み此等の中心地のど
れかに近い土地からの通信はその中心を通じてな
されること出来る。此の狀態は分配の集中され
た中心の成長を刺戟した。此の刺戟は地殼表面の
地形の變化から獨立して居りそして若し既に道が
作られて居るならば完全に鈎合の好い平面に存し
て居る然し乍ら谷や丘や野に依つて又國境土地

の連接及び水路の分流に及ぶ運搬の隙に依つて其れ無きよりも分配の中心は少くなされ又より大きくされる。

「そこで吾人は商業の中心を河の落ち合つて所や航路の源流及び野の接合點又其他の乗物を換へねばならぬ物理的地形に發見する」(Weber, The Growth of Cities, pp. 12-3)之

同様の地に於ける分配の集中は甚だ多い集つて來る貨物の大量に依つて運搬の單なる肉體的仕事は多くの人の——即ち舟人夫鐵道人夫及び其等に類する人の労働を用ひねばならぬ。然し乍ら一般に分配の中心は此等の肉體的運搬よりもつと大切なことに關して居る。其地に送られる貨物は大量に他の町の顧客に賣却せられた物でなくては賣るための物である。斯くして分配の中心は同時に倉庫業の場所になつて來る。所有者の變換が乗物の變更と同時に其處に起つて來る。此れから

『一時的貯蔵の機械的裝置が加へられ商業的交換の複雑なる仕掛に代る』(Ibid. p. 173)輸出入商の代理店銀行取引業其他無數の仕事が生ずる。富が増しその場所に人が集つて來れば貿易の進歩と共に他の地の産物に益頼る様になり此の分配の中心に於てなされる仕事も亦大なる。そして此れで全部ではない。世界の年年の富の増加は貿易の量の倍加と云ふこと以上に部分的の生産者の單なる絶體的の量ばかりでなく交換せられた産出高の比率の膨脹をも意味して居る。此れに依り

『分配の進行は有力なる活動をする凡ての労働者の増大する比率を要するであらう』(Ibid. p. 224)其の結果は現代文明世界の手磨き通商と共に仕事の集中は工業都市に於てなく商業都市に於て最も大なるのである。

私が今まで研究した直接に作用する集中の原因——それは普通に云はれる如くある工業をなす爲に若しくはある商業をなす爲に多數の人を一緒にする原因である。然し又其處には間接に影響する他の原因がある。何等かの目的のために幾らかの人が或る場所に一緒になればそれは直ちに又他の人人を其處に集める原因になる。此の理由は人人

の集團は其の近くに働く他の人人に依つてのみ爲され得る労働を必要とするからである。若し或る土地に十萬の人が炭礦や紡績業又は商業に従事して居るとすれば此等の人は建築師店番パン屋肉屋修繕人醫者銀行種種の娯樂等の仕事の地方的要求を生ぜしめる。斯くて炭礦紡績業或は商業に負ふ所の町は必然に此等の仕事の一又は他のものに實際に従事して居る町の核心よりもつと大きくなる。而してかくして工業や商業の町は實際の表面的な條件が暗示して居るよりも尙一層大なる範圍となる傾向を持つて居る。

私は今他の且つ甚だ重大なる點に來た、今迄工業と商業の都市を別別に考へ又實質的に異つて居ることが暗黙に確められた。然し乍ら水力の時代が過ぎ石炭の運搬が安價に且つ敏速になつたと共に私が前に主張せる如く工業の都市を特殊の土地に作る支配的の力はなくなつた。此等の状況の中に工業都市と商業都市との間に如何なる地方的關係があるか。二つの傾向は合併するか或る土地に商業都市が存在すると云ふことが他の場所よりもその土地に工業の集中を誘引するか。此の點は重要である。何と云へば二種類の町が混同する傾向があるならば或る地方に於ける獨特の集中の範圍は他の場合よりもつと大であらうから。混同する傾向が若し存在するとすれば簡單に云へば其れ自身が集中の原因である。如何なる程度に此の傾向は存するか、商業都市に工場が建てられるとその製産品を他の都市に送る必要がなくて最後に消費する所の顧客にこまごまに手数が省ける。此の利益は運搬の費用を減少せしめることになる。それは常に幾らかの程度に於てである。此の利益は商業都市に於て商業的目的の土地の需要の爲工場敷地やその工場に使はれる労働者の住宅の敷地が高價であること云ふ不利益よりも勝つて居る。工場が町の中に置いて町の外に住んで居る労働者を使用して居る工場が尙、郊外にあつて其の附近の労働者を雇ひ従つて高い家賃や、通勤費を含む餘分の賃金を拂ふ必要がない工場よりもつと費用の嵩む條件の下に於いて、作業を續けて居る。此等の相対抗する力の相互作用の結果は一般に商業都市

の郊外にある工業の一般性即ち集中された位置といふものは本質的な特別の理由から定まる様に思はれる。

工業都市は商業都市と合併せずして中心の太陽に衛星が引かれる如く商業都市の附近に引き寄せられ勝である。斯の如く安價な土地の利益が分配の中心に近いこと云ふ利益と一緒になる。

『勿論マンチエスターリージョンは未だ木綿毛織物、絹織物の取引の主要中心地ではあるが最早此等の原料の大部分を産出はしない。マンチエスターは工業的の町村に依つて圍まれて居る』(Weber, The Growth of Cities, p. 47) 此の論議の初めに起つた労働の集中と生活の集中との間の相違に立ち戻つて見る。工業の仕事と商業の仕事は分類せられ勝ちであること云ふ風に吾等は考察した。然らば此の分類は労働者の住居と云ふことに如何なる影響を持つつかと云ふことに疑問を持つ、勿論旅客運賃が非常に高い場合には凡ての労働者が其の仕事の近くに住むこと云ふことは當然である故に労働の集中といふことは實際に同等の生活の集中をも含んで居る。然し乍ら近代社會に於ては旅客運賃は餘り高いものでもなく又速力の運賃も如く朝早くから働き初めればならぬ者は兎に角其の土地に住むことに制限されることが多くの労働者の大部分にはその必要はない。若し彼等が望むならば彼等は工場から四五哩も離れた所に住むことも出来る。尙此の事に依つて安い土地従つて安い家賃の家を得て此の項目の貯蓄で毎日の通勤の煩しさを費用と打ち勝つことが出来る。故に經濟力の一般的作用として工業都市を中心商業都市の周圍に恰も衛星の如くに散在させる傾向があり又商業都市と云ふ中心の太陽の周圍と其れを取り巻いて居る工業都市と云ふ小さな衛星の周圍とに労働者が依つて占められ村落が散布される様になる。商業都市自身に使はれて居る労働者又は大なる工業都市に使はれて居る労働者の大なる集團は、彼等の労働地から稍離れた所に住む様になると云ふのは土地の値段は大なる範圍に於て高いからである。小なる工業都市に使用されて居る者

はその附近に住むことが出来る故に若し町が大變小さければすぐそばに住むことを要する。今迄得られ切り口上に述べられた結果では尙不明であるが労働並に生活の集中に向ふ傾向は大都市が與へ得る利益の比率以上に下層階級の労働者を引き寄せる事實に依つて幾らか強められる。人を餘分に引き寄せること云ふことは種種の土地に於ける利益を熟視して居る労働者が眞實の賃金よりも金で與へらるる賃金を求め勝つたこと云ふ傾向に負つて居る。斯くて價額が地代の高い土地の利益は誇張される。其れは又大都市の生む妖力即ち斯る大きい都市に於ては或る物は確に變ると云ふ感じ即ち彼等の現在の運命に漠然と不満である凡ての人に現はれる感じにも依つて居る。

此の思慮なき引き寄せる力に生活集中の直接の原因がありして此れは仕事集中を又生ぜしめる下層階級の労働を過剰に供給することは異常の賃金の降下を意味して居る故に商業都市に工業を始めると云ふことは彼等の労働を利用することである實際吾等は斯くして眞實に合理的に經濟行爲をなす爲め以上に大なる生活や労働の集中を見る。然し乍ら根本的に換へられないで前述の一般的傾向と粗略にも曲解される結果となる。労働に課せられる一般の配置は斯くして大きな商業都市の周圍に労働者の村落を群からせる制度を持ち來らす傾向がある。直接若くは條件付の國家の奨励といふ方法に依つて或る程度に此の配置を變更することは運輸賃金を支配する人人の力にある。

生活の集中を防ぐ力は遠距離と近距離に於ける運送の鐵道賃率を殆んど同様になすことに依つて強められることが出来る。此の種の賃金が貨物に課せらるれば商業都市の中に又はその近くに工業町が生ずる傾向は弱められ此等の町を散布せしめる事に依つて此等の衛星をも同時に散布せしめるであらう。若し此の方法が旅客運賃にも課せらるれば労働者が仕事の附近に住む傾向は弱められ商業都市の周圍又は工業町に附隨して居た斯る村落も散布せしめられるであらう。其の結果多くの労働者の住宅は田園に建てられるであらう。(完)

關西大學ステイディアムの設計に就て

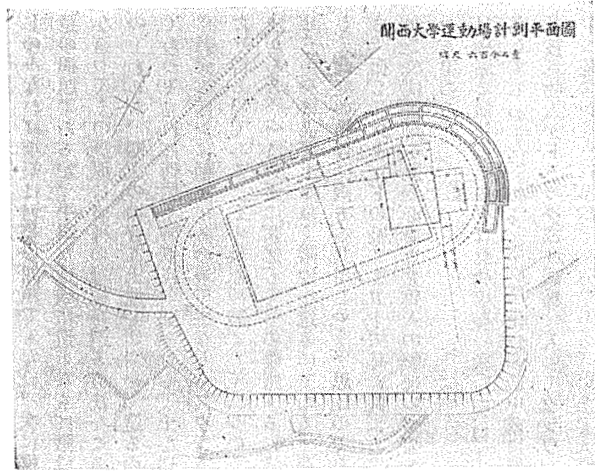
本學ステイディアムの工事が着着進行しつつあることは別項所報の通りであるが、今その規模内容の一般をより詳しく髣髴せしむるよすがとして、設計者の説明書の大要をここに紹介する。

總説

軌近運動競技界の世界的波瀾は我が若き日本を席捲して今迄のインドア・ゲームから一躍して紺碧の青天の下に男性的に活躍する戸外運動競技に目覺しき進展を見るに至り、殊にこれが日本に於ては殆んど全部を占むるに至るまでに血氣にはやる學生の手に收められて居ると云ふ状態になつたことは誠に慶賀に堪えぬ次第である。中等學校は言ふに及ばず専門學校及び大學に至るまでその技を練り全國の大會に或は對校競技に又はインタカレツチエートに、互に旗を削つて相争ふ様は實に大正聖代の一大偉觀である。従つて各學校に於て優秀なる選手を求むると共に益技を向上せしむることにつきて専ら努力するのは尤な次第であるが、運動競技の向上は凡て原則として規則正しき練習と善長なる指導に俟つことが多大である。處が正しき練習には正確なる計畫に依り完成せられたるステイディアムを必要とするのである。

運動競技界の先進國として世界の最優秀なる選手の絶對多數を有する米國に於て見るに、各洲立大學に於て既に數萬人を包容する立派なステイディアムをその殆んど總てが持つて居る翻て吾國の現状を見るに、二三營利會社の經營にかかると及び明治神宮外苑を除けばトラック及びフィールドに於ては一高の狭小なるものが稍其形態を有する外不完全なる駒場農大のそれが東京唯一のトラック

たる有様で實に其貧弱さに於て問題でなく、而も營利會社經營及外苑等に於ては使用條件等に於て隨意に充分使用するの機會を得られないから遺憾なき練習には適しない。ただ野球場に於ては早慶明等各大學に於て所有して居るが、それもまた單に野球のみに偏して全般の競技に適する完成せられたるステイディアムと云ふのは一つもない譯である。そこで今度關西大學がステイディアムを造ると云ふことになつたに就き折角造るならば是非



關西大學運動場計劃平面圖
（長六、六百、幅四百、八）

野球、蹴球、陸上競技その他何種の競技でも出来る完全なるものを造つて一つに斯道の發達を期したいと思ふのである。理想としては又別別に其敷地を求むるのが一等であるがこれは經濟と土地が限定されてゐる限りは望まれない事であつて致方なく、少し苦しくはあるが挿入圖面の通り各種の競技を爲す場合各競技を同一時間にやらせたいと云ふことを前提として位置を決定しステイディアム全體の形を定めたいのである。

位 置

位置は關西大學千里山學舎に隣り詳しく言へば大阪府三島郡千里村大字佐井寺即ち新京阪電車大學前停留場より二丁餘りの處で北に松並木の小高い學舎を背負ひ南に面した丘陵上にある。此丘陵を開鑿して平坦ならしめ所定の廣さを造るものであつて約六千坪の敷地内に全部を包含しようと思ふのである。

設計の大要

先づ第一に陸上競技場としての計畫を示せば、トラックの全長を四百米突にとつた。これは八百、千六百等二周四週計算が仕安く且つスタートとゴールが觀覽席の前に来る一つの方法をとつたのであつて、全體を兩端に半徑百呎の圓弧を有する楕圓形にて直線の部を三百四十一呎餘とする（距離の測定は御承知の通りこの形の十八呎外周を測定するのであるがこの直線を多く取つたと言ふことは後で説明するがこの場所蹴球の場所をさためである。而してコースの内觀覽席に面する一側の直線の部の幅は二十呎その他の幅は十五呎として二十呎のコースの一端を圓弧の切點から一百呎だけ延長する。これは百米突直線コースをこのラインにとつた時にゴールの先に多少の餘裕を取るためである。これは標準の形に從つたものであつてこれによつて造つてゐるのがアメリカのオハイオ州立大學のステイディアムで、ハーバードステイディアムもこれと大同小異である。日本ではコースの幅は少し異つてゐるが京阪電車の寢屋川競技場及び大阪市設競技場も皆四百米突トラックである。而して全體としての方向を東北に向ふたこと云ふことは選手及び審判員等を日光に面せしめたいこと云ふ必要からである。これでトラックとしての形の説明は大略済んだがトラックとしての構造は理想としては地盤一呎を鋤取り充分固め、後八吋の厚さに碎石を疊積し其上に二吋厚に礫滓を填充し更に二吋厚の表面補裝土を敷均し（表面補

裝土は山土二、粉末礫滓三、の割合に造る）三屯位のローラーで敷固めるのであるが、この邊の土質は割合に透水性で排水に苦痛がないから最下層の碎石を省いても好いと思つて居る。トラックの内界のフィールドの方を高くしたいのであるが、これを造るときは野球場として不都合があるので遺憾ながらこれだけはやめるとし、ただその周界を明らかにするために適當なるものを地中に埋め置き競技の際にそれによりて白線にて明示すれば宜しからんと思つてゐる。フィールドの内を蹴球場に充當する。蹴球場としては三百三十呎×六十呎の面積を要するが丁度フィールドの内に納まつて尙ほ兩側に二十呎の餘裕を有することになる。フィールドとしては表面補裝は別に要しないが表面に芝を植付けたいと思ふ。次に野球場の配置であるが、野球場としての廣さをどの程度に止むべきかと云ふことは六ヶ敷の問題であつて、プレーヤー本位とするならば廣き程多利益辨するのであらうが、見物する人達にとつて餘りに廣きに失する時は行程にしか見えなない選手の動作に興味を殺されるものであつて或程度に止めること云ふ必要がある。而して最少限度の二百三十五呎等は餘りに狭きに失し、又その競技場に特有のグラウンドルールを造つて選手のために煩鎖な思をさせなければならぬと思はれるから最も適當と思はれる廣さ例へば京阪、寶塚、その他駒澤戸塚等の最少限度即ち本壘よりファウルラインに沿ふ最短距離を三百呎にしようと思ふ。本壘の背後は規則通り九十呎をトラックの外周よりとつて本壘の位置を定めた。而して投手の方向を眞北に向けること挿入圖面の通りになつてトラック及びフィールドと交錯する。これで野球場としての位置は決定する。野球場としての内野も矢張り表面補裝したいのであるが、トラック、フィールド程にレコードに關係しないから排水さへ充分なれば現在の儘でも幸甚出來むことはないと思ふ。但し

ホーム・プレート及びピッチャース・プレートは規則通りに地中に埋める。然しピッチャース・ボックスは出来得ればベース・ラインより十五時も高くしたいのであるが斯くすると蹴球に差支へるから止むを得ず平坦の儘とする。外野は矢張り芝を植付たいと思ふ。以上で競技場としての設計の説明は大略了つたつもりであるが、尙ほホツケイ・パレーボール・バスケットボール等は皆臨時に適宜フィールド内に於て規定の寸法をこつて舉行出来る筈になつてゐる。次に観覧席であるが観覧席は簡單の様で實は試合を左右する場合なしとしない。それで選手の意氣を緊張せしめるためにも又甚だ重大なるものであつて見物の側から言つても亦樂に見得ると言ふことが必要なる事言ふまでもない。一體に平坦なる場所には甚だ見悪いものであり、仕合する側から言つても亦周囲が空漠漠に見えて甚だ仕悪いものである。それで理想的に言へば周囲を見物席にて圍む、即ち摺鉢の周圍に見物席を設けその底に競技場を造ると云ふことになる。外國のステイディアムは皆それであつて我が國に於ても大阪市設のもの及び神宮外苑が稍その趣をなしてゐる。何故に摺鉢の底を賞揚するかと言ふ見物と、仕合者とか仕合そのものに融合統一さるるの何と言つてもこの形に限るのである。ところで關大のステイディアムはと見ると遺憾ながら土地の事情が許さないために二方は充分にその形態を盡せるが、他の二方は如何とも仕方がない。而し幸にも一段と小高い丘が前面にあるために少しはまごまりの付いた感じがすることに思はれる、それから次に見物人の收容人員であるが、これは仕合そのものの質によるが先づ現今の状態によれば野球に最も人氣が集り、夏季甲子園グラウンドに於ける全國中學校野球試合が最大の仕合として五萬人と云ふレコードを持つて居るがその他の野球試合に於ては先づ四五千人が最も目立つ試合である。

陸上競技や蹴球等になるに千人と言ふ見物を集めるには可成宣傳が必要である。そこで關大ステイディアムの場合であるが、先づ新京阪電車の輸送能力の問題もあり餘りに膨大なスタンドを造つて見物寥寥たる有様よりも氣持よく樂に見物し得らるる程度の五千人級のスタンドを築造するが最も策の得たものではないかと思はれるので、それに基いて設計した、收容人員の大を誇るは地の理と時の流れを俟たねばならぬ。現在の状態に於てはこれで充分でないかと思はれる。それに又スタンドのみなれば増築は何等の問題でもない。次に構造の問題であるが、平坦な地域に造るならば階段を造つてその裏面に諸種の設備を造る方法を造るのであるが、關大の場合には土地を切開いて造るのであつて見れば切開く時既に勾配を付して土を切り表面に僅かに補裝するのみで完全なるスタンドたり得るのである。その表面補裝として二つの方法がある。一は表面に張芝してその儘座するに適せしめ一は混泥土を以て階段を造るのである。而して此度の場合には兩方を共用しようと思ふのである。而してスタンドの長さを五十呎毎に區割したのがこれは通路を造る必要と見物人の整理の必要とからである。

見物席と競技場の界は見物席を一段(三呎以上)高くするやうにした。これは仕合の最中或は終了後見物人がトラック或は球場に入つてグラウンドを荒すからそれを防ぐためである。以上で大體を盡したがその他見物席を勾配に造りたる場合の雨時に於ける落水の仕末等に細心の注意を要すること、撰手控場及び水洗場、野球場正面スタンドの球除網、スコア・ホール、インヂケータ等の設備、周圍柵、入口等の問題も亦考へざるべからざる必須の事項である。(完)

金五圓也	明三二法	後藤徳太郎氏
金貳圓也	大―四專法	宮島晏夫氏
金參圓也	明四二法	齋藤義雄氏
金貳圓也	大―四專商	吉松俊之助氏
金參圓也	大―四專法	山本忠亮氏
金貳圓也	推	白神亮氏
金參圓也	明三五法	寺田梅治郎氏
金貳圓也	大―四專法	長野友市氏
金參圓也	推	寺島由松氏
金五圓也	大―四專法	坂口勝氏
金貳圓也	大―一商	辰巳寅造氏
金參圓也	明三八法	長谷川威亮氏
金五圓也	明二三法	大西虎造氏
金貳圓也	大―二商	今福伊三氏
金參圓也	明三六法	田村芳太郎氏
金貳圓也	大―四專商	山本左一氏
金參圓也	明三四法	木下幸平氏
金貳圓也	明四二商	志野覺次郎氏
金參圓也	大―四專經	山岸源一郎氏
金貳圓也	明四四法	加邊力氏
金參圓也	大―二經	神吉薫次氏
金四圓也	明四三法	中田豐雄氏
金參圓也	大―四專法	橋本利八氏
金貳圓也	大―一經	糸島實太郎氏
金參圓也	大―三法	鞠谷安太郎氏
金貳圓也	明三九法	渡邊信男氏
金參圓也	明三四法	安川勝太郎氏
金拾圓也	小田達夫氏	
金五圓也	大―二法	鶴原嘉馬太氏
金貳圓也	大―一〇商	石川良助氏
金五圓也	大―四專經	吉田等氏
金參圓也	大―一三商	頓戸勇氏

學生諸君に告ぐ

千里山學報投稿に就て

▼學友會各部の記事、各種研究會、親睦會、縣人會その他學生諸會合の記事、論文、文藝作品等本誌に掲載希望の原稿は、總て千里山學舍圖書閱覽室内及び福島學舍學生入口左側に設置してある千里山學報投稿函に投入して下さい。但し寫真その他投入不能の材料は事務所又は學報局へ直接提出して下さい。▼每號締切は前月二十五日限りとし、その以後の分は次號に廻します。▲尙ほ學生諸君の投稿で編輯の都合上二三號に廻したものであることを斷つて置きます。

大正十五年二月
關西大學學報局

大正十五年二月十三日印刷
大正十五年二月十五日發行

大阪此花區上福島北三丁目
關西大學學報局

編輯兼發行人 辰巳經世
大阪此花區上福島北三丁目

印刷者 飯田彌之助
大阪此花區上福島北三丁目

發行所 關西大學學報局
大阪此花區上福島北三丁目

福島學舍 關西大學
電話土佐堀一〇四九

大阪市外千里山
關西大學
電話吹田一三三

○募集人員 第一學年約二百名、第二學年補缺若干名

○出願期間 三月一日ヨリ同三十一日マデ

關西大學 第二商業學校生徒募集

○入學試験 四月一日 及 同 二 日

○特長 甲種認可、修業年限三ケ年、夜間教授

大 阪 市 上 福 島

關西大學福島學舎

(會照ニ校本ヘ添テ錢五券郵ハ細詳)

○募集 第一學年百五十名、尋常小學卒業

○願書 三月三十日マデ受付

關西商業學校生徒募集

○入學試験 三月三十一日及四月一日詳細入學心得ニアリ

○入學心得 其ノ他ハ本校ニ就キ又ハ郵券五錢送付

大 阪 市 上 福 島

關西大學福島學舎

校舎新築四月移轉

第一部 (甲種) (晝間部) (五ケ年制)

入學資格 (尋小卒ヨリ) 第一學年百五十名、二年三年若干名

第二部 (甲種) (夜間部) (四ケ年制)

入學資格 (高小卒又ハ) 銀行會社商店委託生ハ無試験 第一學年百五十名、二年三年若干名

甲種 北陽商業學校 (文部大臣甲種認可及指定)

願書 受付二月十五日ヨリ毎日午前九時ヨリ午後七時迄 場所市電天神橋終點北二丁東現假校舎ニテ

新校舎移轉 四月一日ヨリ新京阪電車(千里山行) 淡路交叉點東南約二丁半

(高女) 本科 (五ケ年制) 一年百五十名、二年三年四年五年若干名

(女學校) 家政經濟科 (四ケ年制) 一年百名、二年三年若干名

文部省認定 淀の水高等女學校 (生徒募集)

願書受付 二月二十日ヨリ毎日午前九時ヨリ午後四時迄

場所 市電恩貴島南之町下車北へ淀川河畔 阪神電車傳法驛下車淀川ヲ下へ約三丁

大學生令依

大學豫科

募集學年 第一學年

出願期間 二月十五日ヨリ四月五日マデ

試驗科目 英語、日本作文、代數(商業學校卒業業者ハ商算)

試驗期日 四月七日ヨリ同九日マデ

專門學校令依

專門部

募集學年 第一學年

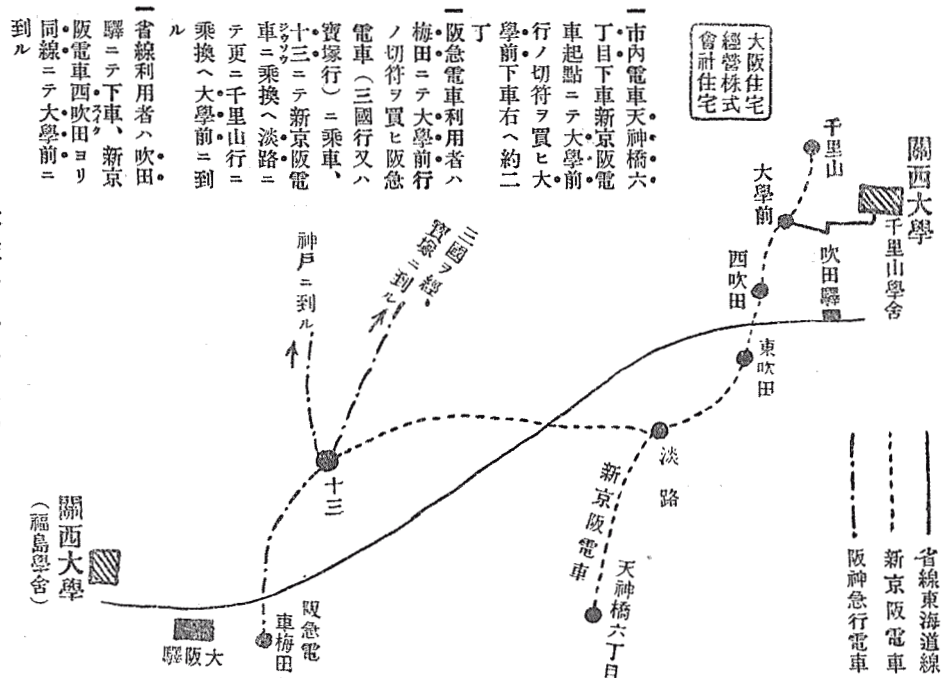
出願期間 三月一日ヨリ三月三十一日マデ

試驗期日 四月二日及ビ同十日

科別 法律學科、商業學科、經濟學科、文學科

關西大學學生募集

關西大學千里山學舎交通略圖



會照ニ宛課務教舎學島福上ノ記明(部門專ハ又科豫學大)科學願志ヘ添錢五券郵ハ細詳